冷菜集

梅の散る頃に死んだと云ふばかりで無く不思議に梅を見ると伴を思ひ出す。恰も玉夢樓の詩句に冷蘊疎枝清入骨と有つたので此册を冷蘊集と名づく

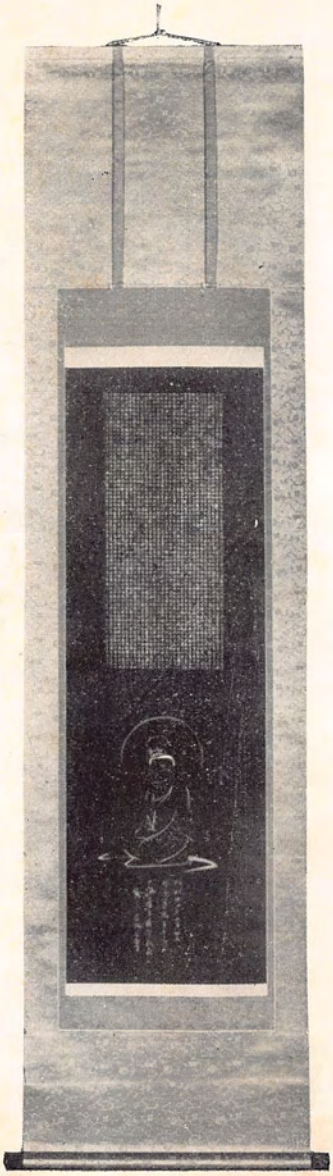
一路居士

一路居士編

馬場辰雄回向出版

冷蕚集

和風堂版



一路居士拜寫觀音一洗居士題普門品全卷（二十歲）

ハイキング

馬場辰雄二十歳小影

上州神津牧場に於ける

思ひ出

於和風堂　天香

「冷蓋集」と題して辰雄君の遺稿が出ると聞いた。校正にまはつて來たグラ刷で、その中の一節〝六萬行願〟を讀んで懐しさがこみ上げてきた。それは、自分の發願した六萬行願を、かうもしんみり身に行じてくれられたのかと思うてゞある。

また、親御の一路居士の述懐をきいた。

「あれは皮肉な處を持つてゐました。天香さんからいたゞいた短冊を掛物にすると申しましたから、短冊は短冊なりで保存するがよ

いと云うたのに、ある時チャンと掛軸にして持つて來て、〝箱書を賴む〟と申します。〝わしの云ふことを諾かないで……〟と思ひましたが、〝出來たものなら〟と一見して箱書をしたものでした。

あとから聞けば、軸の中身は天香さんのものでなくて彼の臨模であつたので、本物は短冊のまゝ保存してあるとのこと。親父を一ぱいかつぎましたのです。〝親父の鑑定眼も危いものだ〟と笑つてゐたさうです。

親の云ふ通りにすなほにやつてのける彼でしたが、またこんな茶目もやりをりました。」

眞面目で、柔順で、すこしのゆるみも見せず、丸ビル銀座の名物店和風堂を父に代つて護り立てゝゐられた辰雄君の面目は、この兩面が一如になつてあることで、躍如として現れてゐる。

自分は、辰雄君が一燈園生活もしてくれた人だけに、何となく親しいので、店に行くと随分世話になつたものだが、誠に氣輕にさらさらと便宜をあたへてくれられたものである。時々顔色の悪いこともあつたので〝疲れられたのかな！〟と思うたこともあつたが、どうやらいつ死んでもよい覺悟はついてゐたものらしい。

「觀音奇緣」のうちに、父なる一路居士の當時の歌がある。

かくなればとまれかくまれはたらきて
はたらきながら死なんとぞおもふ

子を失つた親の悲痛な悟りとも味へるが、今はからりといつもの和風堂主人である。立派な後繼を死なせて惜しいことではあるが、世の中はこんなものである。

〝辰雄さん、父上も元氣だから安心なさい〟と一言をたむけて、こ

の一文を父上に渡したことであつた。

昭和十五年三月廿日

目次

思ひ出（序）……西田天香師…一
本所の老人……一路居士…一
倅の死……仝……二
觀音奇縁……仝……六
倅の葬式……仝……八
香語……西田天香師…一〇
挽歌十首……峡南先生…一一
倅を亡くした後……一路居士…一三
和風堂由來……仝……一五
晨朝のお參り……仝……一九

親子と翰墨……一路居士…三
六萬行願……馬場辰雄…三一
四滅集……馬場辰雄…七九
一　序にかへて……七九
二　私の紀行文……八一
三　淺間丸の客となつて……八三
四　下町に住つて……八六
五　海へのあこがれ……八八
六　訃報……八九
七　木屑錄を讀む……九一
八　文學に志した頃……九五
九　詩と田の作り方……九九
十　はじめて見る大阪……一〇一
十一　二百十日すぎ……一一〇

十二　雨の嵐山……一二
十三　京の大文字……一二三
俳　句……馬場辰雄……一二六
詩　四萬温泉……仝……一二八
新緑の山路……一三〇
旅の思ひ出――上毛ところどころ……一三四
麥はのびたり――上毛の旅から……一三八
巍濃荘訪問記……馬場辰雄……一三〇
北輕遊記……仝……一四三
上高地に遊ぶ……仝……一五五
旅にて……仝……一六七

仲の餘德か、不思議の同情を得て、此書の出來た事を感謝させられました。山下謙之助君が印刷に骨を折つて下さつた御かげで漸くまとまつた時恰も、其校正刷を見た一燈園の鈴木五郎兄が、進んで校正を引き受けて下さるやら、折もをり、西田天香師が早速これに序文を賜はり、思ひもよらぬ本格的のものに成つた事は望外の幸であつた。

謹みて各位に感謝を捧げます。

一路居士

本所の老人

關東大震災の二三年前の事であつた。盆栽を中心にした風雅を語る數名の連中が、兩國の香樹園に丼飯を圍んで話し合ふ會があつた。其時の一人に生粋の江戸兒でその頃六十すぎた位の老人が一人居て實に面白い話手であつた。其人は孤獨で本所綠町の親戚に厄介になりながら、餘生を過して居たのだが、遂に彼の震火で不歸の客となり今でも印象だけは判然して居ながら、名前も忘れてしまつた。其話の中に私に非常に影響した事がある。養子であつたさうな其人が、妻君に死なれた時に養家に對する義理やら、間に出來た一人の男の子の手前、佛前へ誓を立てたさうだ。今後斷じて丸髷を長火鉢の向ふに据ゑない。若し必要とあらば、南船北馬、吉原もあれば洲崎もあるからと云ふのである。其時直ぐ私は反問した。「貴君は其當時、何歳でしたか」と、四十何歳で當時は隨分つらいと思つたが一年一年と其方も樂に成つたと答へた。それ

から又其子が頗る一直者で世間普通の金儲け能力がなく、金を平氣で使ふので、其志を拡げてはすまんと思つて、倅と一所に費つたので、いくらか有つた身上も全部無くし其倅にも死なれたが、今日になつて別に後悔も無い、と云はれた。話は是丈の事なのだが、當時病氣療養中の妻を持つ私にはピンと響くものがあつたのだ。

大正十五年の暮に、私は三十九歳で女房に死別した。三人の遺兒を育てながら、どうやら本所老人の云はれた様な境涯で、まがりなりにも女房を長火鉢の向ふに据ゑる事なしに來はしたのである。

倅の死

育て上げて本人の希望通り女教員に成つた長女は昭和八年春に二十歳で散つて去つた。一人の男子辰雄は十九歳で中學を卒業すると共に、商賣に手不足な忙しい父に同情してか、自分の好きな漢學趣味をなげうつて、其儘店舗の人となつた。がつちりし

た性格と用心深い綿密さとは、私に超えた善い所であつたので、事務的にも営業上にも、頗る成績が上つて、それからと云ふものは和風堂を一日毎に面目を新にして呉れた。其所で思ひ出すのは本所の老人の事である。伜の希望する處悉く親父は賛成して、殆ど其云ふ儘に任せた。凡て金銭の事、商賣の事、擧げて彼に任せ切つた。貧しく育つた自分に缺けた性格を、伜で償ふ心算であつたのだ。費ふなら父子一所に費はう、遊ぶなら親子一所に遊ばう主義だ。所があまりさう云ふ風で伜に任せ切つたので却つて怨まれる程であつた。病弱な彼は重責に段々無理が加つたらしい。若いのに老熟を加へるに從つて彼の人氣が益〻よい。親には非常に我儘勝手を云ひ通して居る彼も、他人には頗るがまんがよくて好かれたのである。

俺は永く保ちさうに無いと衷情を訴へる時など、何卒父より一日後れて死んで呉れと願つたりしたものだ。とうとう倒れるまで働いて昭和十三年の秋床に就いたが最後其時から危險信號で、百日の病臥に色々の宗教的修行を積んで十四年三月四日、溘焉

として安樂國に往生したのであつた。

目を伏せて落たる花を見つめ哭く　良仙牛島一良氏
何事ぞ木の芽よぶ雨降るさへに　淺沼德之助氏
淡雪や庭に一顆の落椿　乙舟永村清氏
窓近く香煙ぬらす春の雨　上野巍氏
俤に水洟すする春寒し　宮阪古梁氏
默坐すれば一輪瓶の梅かをる　友霞增野正氏
南無和南梅の一朶も手向かな　穆堂木下千次郎氏

中田梅榮氏

をしまれてさそふあらしに散りしかな花と見られて若き君には

多田倭文子夫人

ちゝのみの父のみもとにほゝゑみて君はますらむ風なこむ窓
はゝそはの母のみたまとともに來てかたりますらむ和風のまとに

高橋愛次氏

相ともに老いゆくさへやたぬしきにこのよき友を今はうしなふ
なからふるいのちはつひにあらなくに老ちゝもへは吾さへ泣かゆ
年若き君にまなふこと多かりきいまさらにして思ほゆるかも

千代香女

かたり草さはにのこして丸ビルの和風の窓に君はとことは

加藤功氏

ちりつもる浮世をあとにみ佛ののりのみ園にきみはいたりぬ

長谷川忠三氏

梅散るや冬日靜に沈みけり

ゆきませし君を偲ひてあらし山花は咲かねとほとゝきす鳴く

み佛のみち知りませし君なれはみ魂は永久にさきくますらん

菊城道人　原山政記氏

一路春風悟道關　愛兒泉下我親魁

父無哀子又無悼　卽得往生天國回

觀音奇緣

これより先昭和十三年春の頃の事であつた。私が毎日人樣の希望に應じて書いてゐる觀音畫の番號が積りつもつて漸く一萬に近くなつて行く、一萬番一萬番と人の話題に屢上るので、何だか變でたまらない、私は一萬番よりは一萬一番が尙よいのである。

數の一萬を何故左樣に騷ぐのか、自分には一萬番に對する何の別事は無いと云ひ紛らしながら、內心に此は只事で無い或は此一萬番が私の命終を豫約して居るのかとさへ思はれた。其折に伜は、親父は何でも無くても俺が何とかしてやるよ、と云ひ居つた。伜が病床に呻吟中にも番號は益〻進んで遂に三月三日に九千八百番に達した。其時、彼の宗教的修練が最も熟した事を看取して、病人に宣告した事は、よく病み拔けて呉れた。これが絕頂である。これからは快方に向ふのである。あと二ケ月ばかりすれば觀音樣の番號が一萬番に達する、其時こそ一萬番を以て快喜祝をやるのだ。最早や病氣は快方であるぞ、今日こそ通常通りの食事をするのであると云うて、白粥を炊いて佛前に供へ、伜にも一杯戴かせたのであつた。嗚呼何ぞ知らん、其翌朝は遂に不歸の客と成つたのである。所が又不思議なるかな、その時恰かも廣島の熊平氏から觀音供養茶會を開催して來客に頒つ爲めとて觀音畫像を二百枚揮毫して呉れと書いた手紙が到着して居らうとは、伜は遂に其豫言通り一萬番に到達した時に命終したのである。

一萬番は俺が何とかしてやるよ、と云うた通り自らの身供養を以て、私の觀音を莊嚴して吳れたのであつた。

落椿觀音樣の化身哉　　乙舟

永村清氏

土屋女史

一萬の觀音さまのおんともに召し出されし君や尊し

伜の葬式

其時直ぐ思ひ出したのは法華經の藥王菩薩本事品である。悲壯なる莊嚴に打たれた私は早速二百本を書き續けて第一萬本を大畫仙に拜寫し、第一萬本觀音供養讀誦會を三月十二日沼袋の百觀音に開催し、此を以て伜の葬式回向に代へたのであつた。恰も其日が廣島の觀音茶會の當日であつてさきの二百本の觀音色紙が配られた日であり、又第一萬一本は伜の最後迄の尊信の的であつた京都の一燈園に齎らされて、同人衆の

回向を受けたのである。

百觀音に於ける讀誦會は、松田密信阿奢梨の導師で會衆數百人の同聲の普門品、心經、讀誦で頗る盛會であり、折からの春日長閑の好日に惠まれて宛然梵音海潮音と感ぜしめられた。悼ましいとか歎はしいとか云ふ氣では更に無く、只々悲壯なる莊嚴で胸一ぱいといふ語で盡きる。會衆各位に對する感謝の念は勿論であるが、日頃からの人々の恩顧、衆生の恩、佛恩、全部が私にとつての御經であつた。矢張り私自身も何の心配も要らない、只働きながら此行をつゞけて死んで行けばよいのだと判然解けたのである。

永久の生命の前に手向花うつらふ色を日日につなぎて

かくなれはとまれかくまれはたらきてはたらきなから死なんとそおもふ

み光に輝く魂や風和む　　鹿子額賀鹿之助氏

梅散るや百觀音の經の聲　　乙舟永村清氏

鹿兒島壽藏氏

うら若き君を葬ると諸人のひたよみあぐる觀音經のこゑ

つく〳〵しいまたみちかき春の土に君やすらかにねむりたまはん

天香師香語

辰雄さん

御苦勞樣でしたね二十四年

緣あつて世に出て緣盡きて本地に歸るまで事中々容易でないのを、あなたは物心共に泥にまみれずに、きれいに働いてゆきなさつた、御仕合せです。昨日も父上と語りあひ、あなたの御位牌の前で般若心經を回向しましてね、茶菓の供養をうけて壹萬號（實は一萬一本）の觀音像を光泉林にまつる事を約し、みじかい時間に勝境をかたりあひ、法悅にひたりあひましたよ。

今日光泉林でも一同で、壹萬號をまつり回向することにしました。
今日はよき善知識の御導師であり、こんなお仕合せな事はありませぬ。私はおなじみの關さんに、此ことばを託して御燒香を代つていたゞきます。
靜かに白玉樓中におやすみなさい。

天　香

昭和十四年三月十二日

挽歌十首

峽南　間　四　郎氏

辰をこえちりの場すてゝ雄々しくものりの大道馬すゝめゆく

右馬場辰雄四字をよめる

すみつくす二十四年のふるやとになこりをつけてあまかけりゆく

居士若冠獨行以て常人七十の老翁の年業にまされる功を積み、脚痕眞に牢實壯者の

師表たり。

如月はしめ病つのるときゝ床訪れんと、はやり立つ心を押へつゝ、若し定命の至りせば日頃念誦の佛力示現し臨終の苦患を超えて大往生をとのみ祈りつる事の如實をききて

たまのをのたえなんほども氣とられぬやすきうまいをさますにたへず

寂然不動の臨終を頌へて

上品のうてなへ來いと彌陀の聲仰せとあらはいともかしこし

嬉しき親子

三界は一心なりと親もしり子もさとるこそ稀有のためしぞ

日とかゝやくまなさし雲を呼ぶあの太眉

しろかねの鞍おかせつゝ天馬にのる若人のまゆかね太き

微笑、以て互に事を解せしも今はなき君にわびて

はばかりのことゝはしりつ心には己がしやうとゝ日々に愛てしも
食道樂の相棒を失ひ片駕籠にては道中味なし
春立ちて野せりしけれとしたしゝてまゐらするきみの今はあらなく
　金剛不退の閑道人
きのふまて哥兄つらさけしあら男のりのわたしを居士たのむそと
　盡人事克亮天業
天津神さつけのわさの成り就りて無漏の旅路へ梅か香こめつ

伜を亡くした後

ものにふれ心にうこくそのたびの涙は神の賜ものらしも
せめてたゞひとゝきたりと思ふまゝ泣かましものを世は事しげき
伜に死なれてつらくない筈はない。然し考へて見ると年のせいと云ふべきか、段々

重なる不幸に馴れたと言はうか、傷はしさは稍〻らくに感じもしたが、日々にさし迫る營業上の多忙には實に參らせられてしまつた。

哀悼を擅にする事は一つの貴重なる（贅澤な程）感激である。倅が有るといふ事と亡くなつて女兒だけと云ふ時とは、流石に人世觀まで變つて來る。變り者だとか變哲だと云はれる自分でも世間普通の苦勞は身にしみて、急に影が薄くなつた樣になる。あと獨の娘に養子を探さなければならないと思ふと、急に世間並の苦勞が增して來る。

わが庭の紅きにそゆる太幹の野梅もかなと祈りこそすれ

多田夫人

あひまつることの淋しくいた〳〵しなくさめまつる力なきわれ

丸ビルに淋しい親父一人出來

阪井久良岐氏

梅散つて鶴もわびしき歩みなる

古梁宮阪梁氏

中田梅榮氏

若枝をも折られて君はたゆみなくをゝしく進め千代のさか路を

牛島一良氏

咲くや嵐に萼折られて散花をながむる君が心をぞおもふ

七十一歳老人　阪井久良岐氏

巳卯五月廿六日偶憶故馬場辰雄靈位以寄一路居士

さるものの日日に戀しき親父なり

和風堂由來

明治四十四年の暮近く私は年廿四歳で牛込の區役所前に資本金百八十圓でさゝやかな店をはじめたのである。翌年　明治大帝の崩御に會して大正の御代となり、その翌年廿六歳で新妻を迎へた。店はどうやら段々物に成つて來た大正三年長女二女を擧げ、

大正四年の秋は　大正天皇様の御卽位の禮が行はれた。當時御大典記念といふ事がしきりに何物にも動き、私も此際店に堂號を附けたいと希望した。

夏目漱石先生は牛込早稲田南町に住居されて、神樂坂へ散歩に出られる通路の私の店へも自然立よられる機會が多くなりて、段々書齋の道具や文具を買うて下さつた御縁で時々私は先生の「硝子戸の中」へ上つたものである。先生に一つ堂號をつけて貰はうと思つて早速お願ひした所が、案外樂に承知して下さつて、暫く考へたあげく、和風堂では何うかと云はれた。これまで自分では堂號に大いに抱負を表現しようと力んで居た矢先であるので、和風堂とはあまり平凡の様な氣がして喜べなかつた。況んや賣つてゐる商品は支那雜貨が多いので、和風では無い筈である、然し實の處、先生はこはい先生なのである。こはさのあまり批判など口からは出て來ない、結構で御座いまのすと口の方で答へてしまつた。

先生の書齋には、その頃一寸も讀めない草書の幅が澤山ブラ下つてゐる。先生は時

時それを臨して居られる。二十八歳の黄吻には先生の心境を解かる筈がない。誰方の書ですかと伺つたら、越後の坊主の良寛といふ人の書であると云はれた。

書いてやるから墨を磨り給へ、と云はれて、當時自分には墨の磨りかたさへ知らなかつた事を思ひ出す、一枚書かれて又一枚、二度目には墨が足りないで水を加へた。和風堂と書いて漱石と落款されたが、最初のは少々かたくあとのはすんなり出來た。印を捺して兩方共戴いて歸つた。此時捺された「夏目金印」「漱石」の二顆と、間防の「非言能之」は私のお使で岡村梅軒先生に依頼して出來たもので、漱石先生晩年の書によく用ゐられたものである。惜しい哉、このあとの一枚は大正震火に京橋で燒失し、その時鄉里に置いて有つた最初の和風堂三字が、今私の手許に殘つて居る。

和風堂々號は右の通りだが、和風堂は震災の前年春に牛込で類燒にあひ、その時直に京橋の仲通りに買店して、此所で平氣で商賣して居た所が一年と三ヶ月で大震災で、又々散々にやられた譯である。

震災後の復興には別に苦勞は無かつたものゝ一身的には家内の病氣で大に苦勞させられて遂に大正十五年に死別の運命に逢着した。此時にも和風堂の營業には異常なく吳服橋畔の角店に數年の繁榮を續けて、昭和三年秋現在の丸ビルに移つたのである。昭和九年に倅が手傳つて吳れるやうに成つてから、丸ビル和風堂もどうやら目鼻が附いて來た。思へば創立は私であるが、仕上は倅がやつて吳れたのである。今なら私の和風堂は漱石先生に附けて貰つたのであると吹聽しても、まんざら先生の名を穢す譯でもあるまいと思ふのも倅のおかげである。倅の死んだ時に、その俗名を改めて和風堂辰空一洗居士としたのも其意味であつた。生前彼自身、父親の一郎と母親のせん兩名から一字づゝとつて一洗と號して居た。

その折は我足らさりき今にして君いまさはとおもひおもほゆ

（漱石先生をしのぶ）

晨朝のお參り

近年急激に都會の青年の健康が落ちて來たやうな氣がする。京橋の眞中に云はば下町生活の代表的な自分の周圍を見渡すと、殆んど皆子供をやられる。指折り數へると恐しくなる一體昔から東京は繁華であつたのに、これ程身體に惡くは無かつた筈と思はれる。何が其の原因か、此等は隨分專門家の研究が屆いて居さうで實は未だに判らない。昔の生活と殊に變つたと思はれるのは第一に食物、第二に步かないこと、第三は學校に行く事。外にも原因があらうが、此の三つは確かに昔に異なるものと思はれるので、先づ私は自分から玄米菜食を數年前から躬行して見た。これは別事がなく實行されて遂に今日にも及んで居るが、社會的には不自由と見えて自分以外は家の者さへも誰もついて來ない。

上海戰から南京へ　皇軍の奮鬪を景仰しつゝ又案じつゝニュース映畫を見ると如何

にも行軍力が氣になる。嘗て若い時の兵役を思ひ出して大いに行軍力の涵養と自己の健康との爲めにと昭和十二年の十月から、晨朝に起き出て先づ京橋から二重橋前に至り皇居を拜し一つには　今上陛下の御安泰を祈り一つには　皇祖皇宗の御靈に國運の興隆をお祈りし、更に續いて九段坂上の靖國神社に護國の英靈を弔ひ、宮城を一周して歸途旭日を拜みて、感謝を捧げる。此の行程は自分の足で約二時間を要した。雨が降らうが風が吹かうが遂ぞ休まない。かうやつて晨朝の東京を歩いて見ると東京は決して悪い所ではない。嚴冬の、黎明の空の色、新柳のお濠の水鏡にくしけづるあでやかさ、櫻花爛漫の花のトンネル、若葉に煙る五月雨の風情、大内山の紅葉に青松の映ゆる、咲き亂るゝ草萩のこぼるゝ、一日として同じ色無き四時の移り遷る樣皆具はり、ましてや玄鶴の長鳴して大空を過る、山鳥野雉の木の間に遊べる、折々の渡り鳥の水に浮べる、斯樣なる目出度き景を、此の東京の眞中に眺め得るも、あやにかしこき宮居ましませばこそとうなづかれる。自分自身の健康は着々增進し（第一朝餐がべらぼ

うに美味しい）だがあとを跟けて貰ひたい伜は一向跟いて來ない。途中から乘物でもよいでは無いかと奬めたが、矢張り既に健康が許さなかつたらしい。それでも早起して築地の魚河岸へ飯を食ひに行く事だけ實行して約三ケ月も續いたらうか？　伜の友達の島村青年が滿洲駐屯から病氣で歸還して、此の勤行に冬から夏まで約半年伴れだつた。別に六つかしい事はないが、寒空の私の素足モンペ姿（木綿統制令が出てから足袋を止めた）は、丸ノ内を護る人々に異樣扱されて、時々調べられたものである、此勤行だけは是非續けたい、東京に住む青年に是非やらせたいと念願は今でも消えないが、伜に死なれて落膽したと云はうか、用事が增えて出來なくなつたと云はうか。たうとう其の死と共に中絶して居る。

親子と翰墨

親の書いたものなど、他人樣は兎に角、親父の缺點を知りぬいて居る伜がすく筈は

普通にはない。然るに私の書畫を最も愛好して居たのは伜辰雄であつた。彼は畫にはどうも手こずつたらしくて遂ぞ尻尾を見せなかつたが、書は頗るの好き者で、時々漢碑などを臨書して親父よりもうまいぞと自慢して居つた。死ぬ前年の春夏の旅行にも臨書の道具を宿屋へ持參に及んで、大いに氣をのべて居る。二十一歳の時に紺紙に銀泥を用ゐて細楷の普門品を作り、其の中央に私に觀音を書かせて大喜びであつた。其の節自分の二十一歳頃にはとてもこれ丈は行かなかつたと譽めて置いて、あとから親父は自ら口を糊する爲めに商賣に沒頭し、配達の荷車を挽きつゝ獨りでやつて來たのだ。それに較べるとお前は親父といふ先生を抱へてやつて居る、汝の其の位は當り前だぞと大きにたしなめた積りだつた。

稀に親父が書でもやつて居やうものなら傍に見て居てたまらなくなると見えて、貸せ〳〵と筆を奪つて自ら試みる位の間柄であつた。文字の不足である親父に、恰好な祕書が出來ると樂しんで居たのだが。

漱石先生の木屑錄は先生の二十三歳の作とか云ふので、同年位に及んだ倅は、大きに之れによつて刺戟を受けて、角力を望んだらしいのであつたが、病弱は遂に漢學趣味も斷念せしめたらしい。

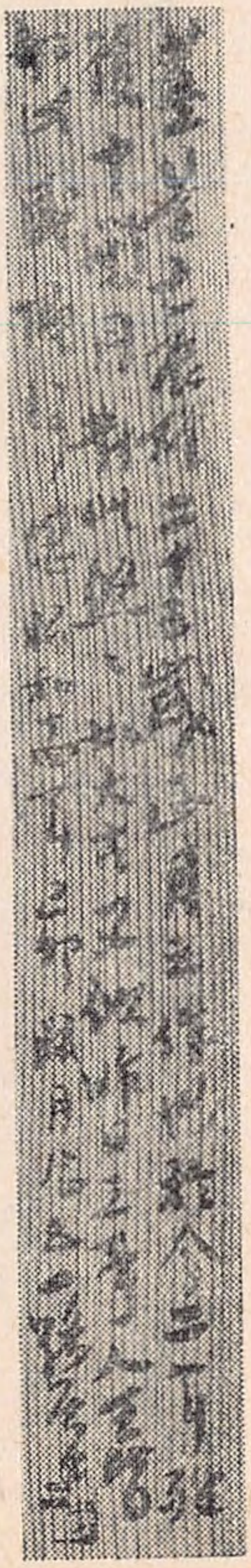
未熟の倅の作品を、此の非常なる時節柄に印刷するさへ、世間へすまないと思ひ、況んや先輩恩顧の諸彦の清眸を穢すことの、勿體なきを思はないではないが、天折した倅に對する親心と、ひたすら宥恕を仰いで、左に二三篇だけ摘出させて戴くことにしました。

更に此機會に於て、感吟芳墨を寄せられ、倅の死を莊嚴せられたる諸賢に感謝を捧げ、其一部を此冊子に抄錄させて戴きます。

昭和十五年三月四日　　一洗居士一周忌に際して

父　一路居士誌

起乱乾坤一章眼中唯有
四山青周来放鶴長松下
虚堂讀易経



天

永

不

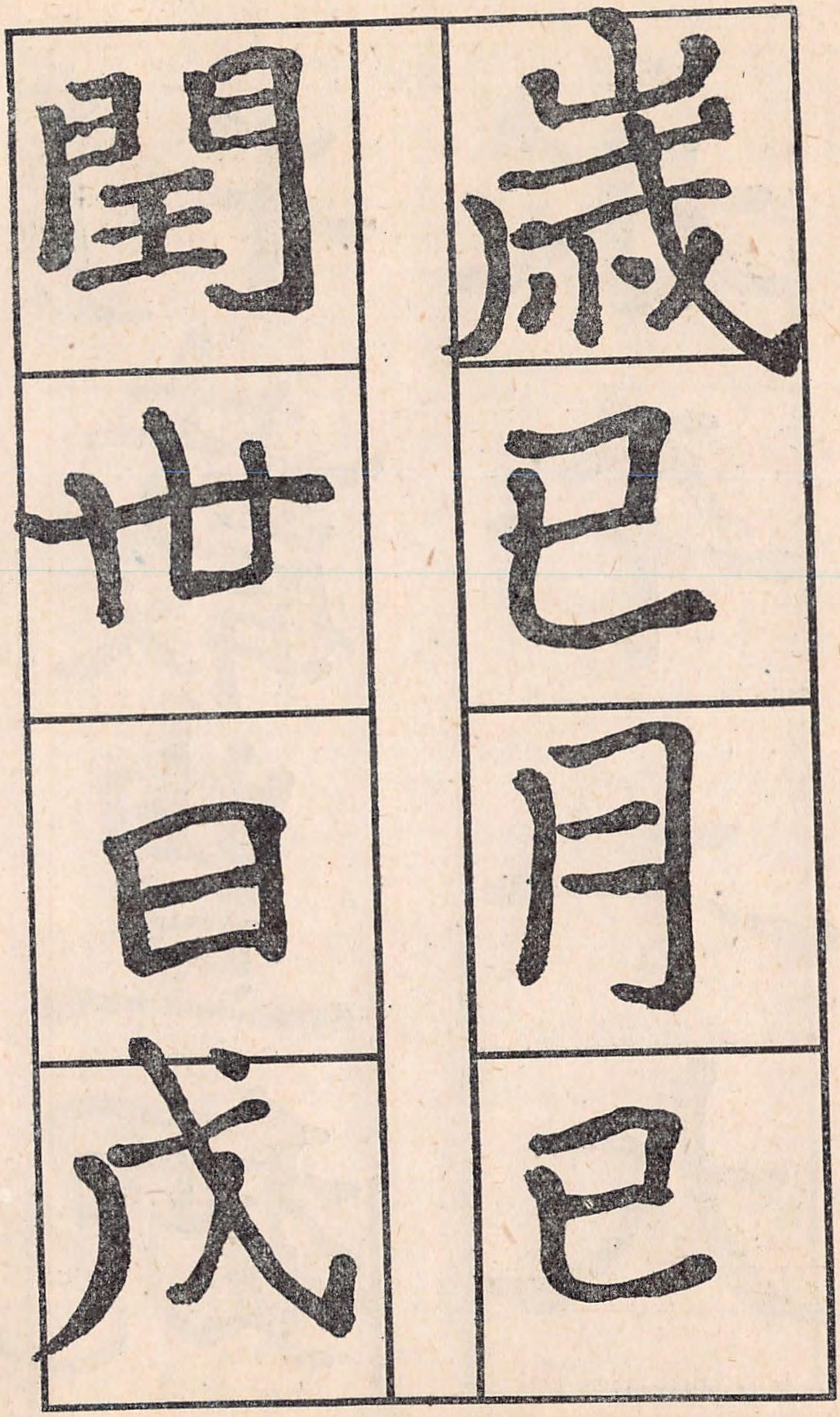
二

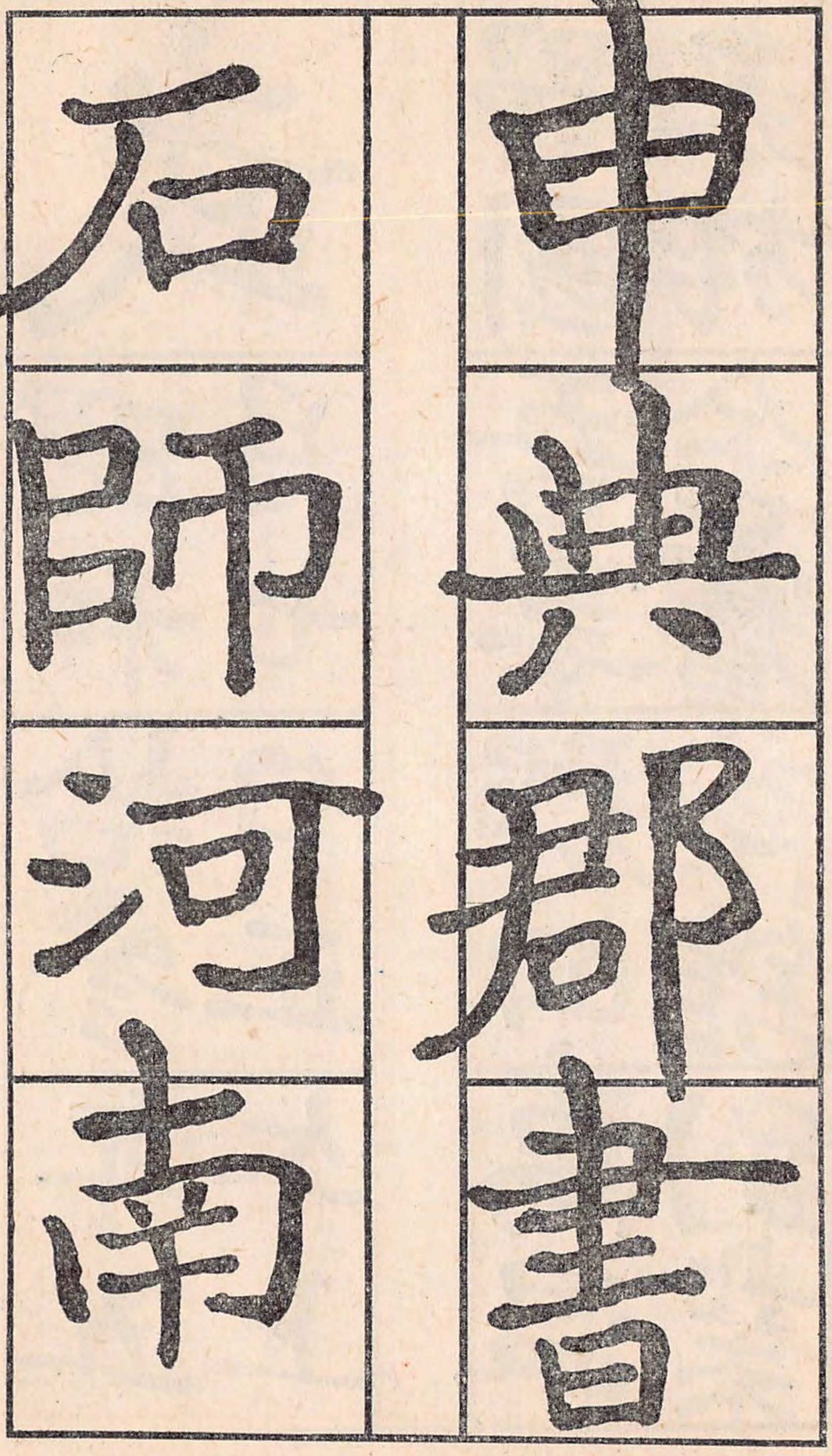
大

敎

曹

全




秦郡守書

武

昭和拾參年五月七日正午上

野國吾妻郡四萬温泉旅舍寶陵館別業

寫與天氣ニ關シテ了ヘル室ハ比日於テ	清朗ナル心氣ノ日	靜着ノ爽快ナル感ヲ
天氣書	誠ニ二七日	達セン

リシ
カト
言ハ
ラス
ヤン
カー
又赤
洗樂
居

二十
馬十
有場
二原
雄
時十
二
リ
歳〇

六萬行願

馬場辰雄

昭和十一年三月一日。

午後八時三十分の神戸行にのり込んだ。關西を訪問するのは今度が三回目である。第一回は小學校を卒業する時、たしか、昭和四年の一月だつたと思ふが、修學旅行に伊勢參宮から京都へ廻つて、その前年の秋に行はれた御大典のあとなどを拜觀した事であつた。第二回目は八年の夏、しばしの休暇を光泉林に送つてその淨業を見學し、自らも進んでこの生活に飛び込んだのであつた。中學五年生の時だつたと覺えてゐる。勿論一回目は一回目で有意義であり、二回目は又自分の內的生活にかなりの衝動を惹起したのであつた。角帽をかぶらずに實業についたのも、少しでも生活を光化しようとしたのも、その大きなセンセーションの餘波に外ならなかつた。

しかし今度の第三回の京都行は前の二者とは一寸その形がことなつてゐる様に考へられる。無論第一回目は全くの見物氣分であつて問題外ではあるが、少なくとも前の光泉林行とは出發點に於てすでに大分へだたりがあると言つてよい。前者は消極的であり、客觀的である。後者は積極的であり、主觀的である。それでは何が積極であり何が主觀的であるか、先づ今度のこの行に於ける主目的を說明しなければならない。それは今度一燈園が京都に於て六萬行願の大結成を行ふのに參加することであつた。（六萬行願の大結成に關する說明は光友誌、並びに光誌に詳細に發表されるはず）實を言ふと、自分は自ら一燈園の書籍を販賣してゐながら未だかつてこれを熟讀したことがない。それであるから所謂一燈園に對する哲學的の見地が、よほど人より缺けてゐる様に思はれてならない。だから、かうして筆をとつてゐても、自分の感じを如實に表現し得ないうらみはあるが、それでも天香師の所謂、

「無心に單調な仕事が出來るならば、それは中々の大業である」

と言つた思ひで、この行願波の中へをどり込みたいのである。かゝる目的がある以上必然的に「積極」が要求され、決定的に主觀性がそなはつてくる。前の光泉林行では出發に際しては、たゞ單に休暇中にその空閑を意義あらしめたいとして出かけたにすぎなかつた。しかし、それでも前に述べた様に自分の內的生活がかなりのジョックを受け、それと同時に進路に大きな變化をした様に考へられた。そして今でもその時の一轉が、生活に非常な慰安となつてゐる様に考へられる。言ひかへて見れば、前者は二途のうち偶然にも幸福の路に進み、後者は進路に大岩石が横たはつて、それを廻る小路を發見することにつとめてゐる様な姿にたとへられよう。

自分は今、つゝそでの着物の上へ紺木綿のひつぱりをきて、雜嚢一つの身輕さ。しかし、どこまでも自分の心は眞けんである。そして今こそ自分はこれ丈の持物（つまり無一物）であると考へた時、氣持が非常に樂になる。どこで横にならうと、どこで坐らうと、この身一つのうれしさを、しばしでも味へる様な氣がする。

「いつお歸りです」

と出發の時、順君に問はれたのを、何となく意外な感じがしてならなかつた。

三月二日。

まだ夜のあけぬ中に食事をすませた自分は六時半、大津の驛を出た。身にしみ込む様なそこびえのする寒さが、まだ夜のとばりにつゝまれた北向の街にたゞよつてゐる。體は大きな緊張に支配されてゐる様なものゝ或種の不安がどこからともなくはひよつてくる様にも感じられる。すぐ上關寺前から京津線の客となつた。午前七時思ひ出ふかい光泉林の門をくゞる自分は、なんとなくなれきつた様な感じと、初めての訪問者らしい心苦しさとを交錯して感じた。回光社で『寫眞機』をかついだ田北さんに會つた、遠來をねぎらひながら行願のこまかい注意をされる。何はともあれ自分はすぐ着物をからげはじめた。橋を渡つて行願隊の列が彼方へ下つて行く。霜柱をふむ皆の

素足がさむさうである。客寮から下駄、西館から帯とあわたゞしくそろへていたゞいてやつと整つた行願すがたで、田北さんと共に一行を追つた。あわてゝぬたせいでもあらうが、落ちついてみるとだんだん寒くなつてくる。着物をひざ下まであげてゐるのでも容易でないのに、素足に小さな下駄が馬鹿にいたい。

四ノ宮驛から貸切電車でたつた。車の中で顔見合せる面々は皆な舊知の先輩達である。この行願が大願であるだけに一行の顔はいやが上にも緊張してゐる。まだ二日目なので不安もとれぬらしい。會ふ人毎に「よくきてくれた」と遠來の自分をいたはり氣味である。それにしてもいやますものは、自分のこの願に對する敬虔の念である。そして自分もおのづからこの一行の心持の中へとけ込んで全く自分をわすれた様な氣持になつた。三條で電車をおりて、行列は大橋をわたつた。先頭には六萬行願のシンボルを表した行願旗を兒玉さんが奉持してゐる。その後にはきりつと結んだ手拭の下にこの大結成の決意を顔に表した天香師が歩いておられる。自分は思はず胸がこみ上

げてくる様な感じがした。六十五歳の御高齢には見えぬその御體の力強さ、しかも默默として伏目に行かれる謙遜な御態度、實に誰か感涙なきことを得よう。その後には小學生班が續き、それからがいよ〳〵第一班から八班に至る各班がつゞくのである。

さらさらと音にせゝらぐ加茂川の流れや、北山にかゝる殘雪も尙春淺しとの感じをふかくする。人樓漸く戸を開いて京の街に夜のあくる頃、一行は三條河原町から右折して北に進んだ。春とは言へ風は身をきるかと思はれ、電柱にのこる二・二六事件の貼り號外を見ては又當時を思ひかへす。仰げば、我等の行願旗が大きく風にひるがへつてゐるのもうれしい。

柳池小學校（御池通り柳馬場東入）につくと、すぐ自分は池田某君と組になつた。そして天香師の發聲で玉雲三昧があつた。師の腹中からわきいでる「おーうん」と言ふ聲は、さながら自分達の心ばせを緊張させる三昧境からの叫びの様にきこえた。それに比して自分の聲のたよりないことよ、全く我が身の至らなさを痛感する。

いよいよ學校を出て行願にうつる。自分は江谷さんの班である。班頭さんから親切に區域を教へていただいて、三々五々はなれて行く。自分は池田君のあとについて第一の家へとび込んだ。たしか帽子屋さんであつたと思ふが、はつきりとした記憶はない。合掌した。

「一燈園から出ましたが、御便所の掃除をさせていたゞきます」

と池田さんのはつきりとした聲である。しかし姿はみえなかつた。矢庭に左端の戸をあけて奥へ入る。後から、

「おーきに」

と主婦の聲がするが、もうまるで夢中である。又二つばかり戸を通つて奥へすゝむ。池田さんが散亂してゐる下駄を手早くそろへる。自分もおくればせにやる。

「お水をいたゞかせて下さい」

と君が言ふ。井戸水がバケツで運ばれる。自分は合掌でいたゞく。それを持つてきた

バケツにうつして用意の雑巾でふく。手がやけつく様に冷たい。しかし、未だ曾てふいたことのない便所それ自體は少しも氣持悪いことはない。たゞ夢中になつて上下二組の便所を大急ぎに掃除した。あまり急がしいので十分でないのをねかんに思つた。しかし、手を洗つた時、池田さんが、

「だいぶ暇がかゝりましたね」

と思はず苦笑した。自分は心の中で思はず、

「安心」

と叫んだ。そして、すぐ次にすゝんだ。次が洋服屋さんであつた。もう自分もやゝ落ちついた。たしかに洋服屋さんである。又、

「おーけに」

と言はれて、今度はお湯をいたゞいた。實に有難いと言ふ感じのみである。理窟はぬきにして全くうれしい。下（シモ）の掃除でも全く普通と變つたことはない。たゞ自分の自轉

車に乗りなれて、他人の車に一寸のつた位の相違にすぎない。しかし、それからうける感激は又特別の方に向つてゐる。天香師の教へる下坐の安心もこゝにあるのかと、思はず自分をふりかへる。

それから軒並やつた。寺町通りの西側を三條から竹屋町まで二十數軒、或は頭から

「わてえとこは、きまつた者でやるさかい、いりまへんわ」

と京都辯でたゝかれて、手を合せて出てくる。

「今朝終つたさかい」

と言つて丁寧にことはつてくれる家もある。さうかと思ふと、手拭や菓子を持つて行つてくれと言はれたり、たまには錢を紙につゝんで出す家もある。勿論拜辭して出てくる。茶をのめの火にあたれのと言はれるのもありがたく合掌して道へ出た時は、何か知らこの道路も娑婆の樣な感じはしない、大きな世界が展開する。ことはられゝば、早く進んで行けるのであるが、やつてゐるからには、非常に悲しくなつてきて自分の

頭のたりないことをわびたくなる。

柳池校へ十一時半に集合と云はれてゐたのが、十二時を過ぎてしまつた。初心の自分と組んだ池田さんに迷惑をかけてすまない感じもした。もう飯の用意がないので一パイ制限であつたらしい、蕎麥を飯にかへた。河道屋さんの蕎麥の味は有名なことながら、はじめてこんなうれしい境地に進んだ自分には、それにもましてうれしかつた。食堂車で輕く朝食をしたので空腹とねむけとが一時に感じられて、午後の集合には何となく腹の工合が惡かつた。

午後は數屋町を夷川通りから丸太町までである。この邊は寺町通りからくらべて一般にきたない。田舍へ行つた様な感じのする家もないではないが、みな親切に祈つてくれた。自分達二人の組は午後は十五六軒であつたから非常に氣も樂であつた。馬鹿にきたない様な感じがしてならなかつたが、やはり一軒二軒とやつて行く中には何とも表現のできない親しみを感じてくる。早く終つたので一二軒他の組を應援した。二

時頃から、はれてゐた太陽がどんよりと曇つた冬の中へとけ込んでしまつた。そしてふきすさむ風は非常な冷氣を身に感じさせた。自分は思はず微かな氣候の變化を感じた。實際東京も昨日まで雪空の寒い日が續いた。しかし京の寒さは又一寸趣が違ふ。何と言ふ形容詞をつけべきかはわからないが、これが所謂「そこびえがする」とでも言ふのではなからうか。三時半再び柳池校に勢揃ひして、にぎやかな寺町通りを下つた。かつての旅行に御所拜觀をすませて、やはりこの寺町通りを列を作つて通つたことを思ひうかべて、自分は轉感慨深い或ものを覺えた。

光泉林前の疏水べりで又王雲三昧（オーウンサンマイ）があつて解散した。自分はすぐ回光社へ行つて身仕度をなほした。全くかうして着物をおろして足袋を穿くと、足袋の有難味をはつきり認識する。そして身が思はずあたゝかになつた樣に思はれた。回光社で暫く親しい人たちと挨拶などして、すぐ門脇にある野田さんの室に入つてお茶をよばれた。野田さんも前來た時とは違つて奥さんをもらつて寮に入つた譯である。入るなり野田さん

は、すぐ無沙汰のわびを言つた。もう全くの光泉林の幹部（預務室の同人と云ふが）であつて、主として宣光社的に活動しておられるから、全くの暇なしである。四方山の話が出た。野田さんが今度の行願のスケジュールをくむ苦心を話されれば、自分も今度の二・二六事件の東京の様子などを話した。自分は全くこの事件に對しては門外漢であるが、しかし新聞その他の報道機關が全くなりをしづめてゐる今日、かうして語るのも何となく參考になるらしい。五時になつて晩食の合圖があつた。自分は馬鹿に中食との間がながかつた様に、まち遠しい様な感じがしてならなかつた。野田さんと二人で中林まで歩く途中、

「光泉林も變りましたね」

と自分は思はず言つた。野田さんは預務室で御食事なさるとわかれた。

夢中で三ばいたべた。玄米飯は非常にうれしくうまく感じられた。わづかなおかずも非常にありがたかつた。食後杉山さんが、

「總寮におとまりなさい」

と言はれた。

「總寮ですか？」

と自分は思はず言つた。光泉林中での御殿とでも言ひたい様な總寮にとまらせていただくなんとは、全くもつたいない様な氣がする。

「印刷場の二階ではいけませんか」

と自分は又言つた。きけば印刷場の二階には一燈園の同人が泊つてゐていつぱいださうである。しかし總寮とても萬更いやなはずはないし、ことに前の入林の時は丁度この建物がたつ時であつた。勿論まだ造作などは思ひもよらぬことだし、左官屋さんが中ぬりをしてゐるのに、もう夏の集りのお客さんが入つてくると言ふ始末、自分は回光社からお客さんを案内して總寮や禮堂にお連れしたことなどもあつた。「思ひ出」と言へば大げさではあるが、なんとなく懐しいものがある。もうすつかり設備がとと

のつて天香師の墨跡も見事な「蘭の間」へ通された。入塾する十七八歳の人と、その親らしい人とが「今日つきました」と言つて居た。名古屋の岡田さんや山本さんもこの室にゐるとの杉山さんのお話である。杉山さんはお客の係りとして總寮や印刷場の二階の世話をなされてゐるさうな。夏の集りとこと變つて、お客もごくまれである。光友全部合せても十名に足らぬであらう。なんとなく腹の工合が悪いので九時の打板で寢床にもぐつた。

三月三日。

午前五時、打板におきる。まだあたりは眞暗である。ひどい寒さをおぼえる。自分は又かなり緊張してゐた。寒さに對してもろい自分には、かなりの我慢である。早速顔を洗つて、そとに出る。五時四十分に至つてはじめて、逢坂山の彼方は白みはじめ刻一刻とその色をました。自分は、

「これではならぬ」

と思つて穿いてゐた足袋もぬいでしまつた。どうも腹がひどくいたみ出した。なんだかおきた時から妙にしぶつてゐたのがいよ〳〵眞劍に痛み出した。自分の心はますますあわて出した。下つてはならぬと思つて便所へ入つたが、たいして下りもしなかつた。靜かに手洗口でやすんでゐて食事の合圖をきいた。どうしても行願に參加しなければならない。參加するのに空腹は禁物であると自分から決心をきめて食堂へ下つた。しかしうれしかるべき食事がどうしても進まない。やつと飯臺について腹をおさへながら一ぱいたべた。しかしもうどうしても手が出ない。お茶を二三ばいのみほしたが何の反應もない。どうやら冷えたのだなーと感じた。もうどうしても立つてゐられない。そつと人氣のないところでしばらく坐つて動かなかつた。「休まうか？參加しよう」と二つの意志が戰ひはじめた。あわたゞしい行願のいでたちが、右往左往するのも氣が氣でなかつた。思はず室にとび込んで行願のいでたちに變つた。その時、

杉山さんが室に入つてこられた。

「顔が眞青だが、どうしましたか」

と自分の顔をのぞきながら言はれた。

「はい、腹の工合が少し悪い様で」

と自分はきはめて平靜を裝つたが、如何ともたへがたい。

「少しお藥でも」

と又云つた。そして着物のからげをつぐけた。「斷じて參加する」と、まだ自分の心はもえてゐる。

「お休み下さい」

と杉山さんが言ふ。しばらく杉山さんと「斷じて參加する」と言ふ心が戰つた。しかし自分とても街へ出てからたふれては不覺であると思ふ不安もある——。無理に我をはつて他人の迷惑になつてはならぬとも考へた。

「りきみ」にならぬ様にと祈つた。甲高い拍子木の音が寒い空にひゞきわたつた。自分は再びふとんの中に病勢の恢復を待つことにした。杉山さんは「お大事に」と言つて、急いで室を出て行かれた。

あたりが大きな潮がしりぞいた様な静けさに立ちかへると、東林の方から「オーウン」と言ふ大きなうなりごゑがひゞいてきた。あたりの山々にこだますその力強き三聲、全く天地合體の遠い昔が想ひ出される様だ。まだ太陽が高くあがらないせいか、何となく窓の外はひやゝかな感じがしてならなかつた。自分は疲れてゐたせいでもあらうが、又うつら〳〵と静かなふとんの中でねむつてしまつた。

いつ掃除にきてくれたのか覺めてみると室の中はすつかりきれいに整頓され、床にきれいな掛物が一幅かけられた。素がきの不動さまである。一燈園流のなごやかな顔容に十二疊の間を治めてゐる様な姿である。春光はさん〳〵とこの大きな室に滿ち滿ちてゐる。かすかな風があるのか、外の杉のこずゑがこゆるぎしてゐる。

「ごめん下さい」

と静かに戸があいて看護婦さんが薬を下さりにきた。自分は思はず、もつたいない様な感じがして上體をあげた。動いてみるとやゝいたい。ありがたく薬をいたゞいて、又伏した。

「静かになさい、もうすぐよくなりませう」

と看護婦さんが言つた。自分も思はず掌を合せた。

薬のせいか、腹を動かしたせいか、又バカに痛みをおぼえてきた。ねてゐても、もうたまらないほど痛い。自分はふとんのなかでえびの様になつて、しばし痛みの中に一切をわすれてゐた。湯たんぽを入れていたゞいてからは小康を得て、しばしの安眠をむさぼつた。

晝食もいただく氣にはならなかつた。勿論書見や日記かきなどは思ひもよらぬ。さめれば逢坂山をながめ眺めあきれば又いつの間にか夢に入つてしまふ。時々感じるい

たみと空腹が一層自分をめいらせてしまつた。自分は殆ど夢中になつて病氣に對抗してゐる樣だ。この靜かな春光あふれる光泉林も、何の詩興も何の感興もおこらない。自分は自分ながら祈りのたりないことをくやみながら、なほ且、病氣になやまされてゐることをあさましく思つた。そして日がながく〳〵感じられた。

夜になつてあついやはらかなうどんをいたゞいた。自分がかうして伏してゐるのでさへももつたいない樣な氣がしてならないのに、あれやこれやと親切にしてもらへるので心にくい樣なありがたい氣持がするのである。

おそくなつて照月さんが見舞つて下さつた。

三月四日。

續いて今日も休むことにする。もう痛みも少ないが、出るからにはやはり統制のとれたいでたちになつて清規通りの行願に加はらねばならず、加はつて萬一又痛みが嵩

じる様だと當番さんや班頭さんは勿論、組の者にもかなりの迷惑をかける。就中あと殘りの日に出られなくなれば猶更心配であるからとの結論で杉山さんから説明されて自分もやつと氣がらくになつた。もつとも今朝も朝食をぬいてゐたのでまだかなり痛む。しかし痛みは變らなくとも氣分が大分晴れやかになつて看護婦さんがすつかり室をあけて下さると、すぐしばらく上體を起してこの靜かな眺めを樂しんだ。今日もかなりさむさうだ。しかし日は靜かになつた光泉林を美しくなごやかに照らしてゐる。時々下の方でしづかな下駄の音がひゞいてくるのも樂しく、すゞめが前のこだちで、ぴい〳〵さへづつてゐるのも美しい添景である。

晝はおかゆをいただいて食べた。やつぱり少し痛い。だが、一すいして覺めて身は益〻元氣になつた。そこへまさ子さんが見舞つてくれた。まさ子さんはからかさで目の邊をけがされて行願を休まれて事務室におられるさうである。やつぱりまさ子さんなどきてくれると實にうれしい。姉さんの様にいろ〳〵面倒を見てくれる。一番色々

な話題が多い。熊田さんや喜良さんや獅子頭をこしらへる杉村のぢいさんなど金澤の話もさることながら、はじめて光泉林へ來た四年間の話がつきない。建也さんが前林二番の大男になつたとか、正弘さんがすつかりよい青年になつたとか、いづれも自分をおどろかした。

まさ子さんの去つたあと自分は猶もこの靜けさの中に沈んでゐた。たまにかう寢込むと體の自由がすつかりきかなくなる。どこを動かしても痛い、下腹がいつもはつてゐる。自分は自分の體がかなりの病におかされてゐるとは思はなくもないが、かうして勞働的な仕事をして見るとやつぱり自分の體のおとろへがひどい樣に感じられて、もつと〳〵養生しなければならないと考へる。養生と言ふものは體ばかりではない。心の修養が第一の急務であると思ふと、かうしてぼんやり寢込んでゐるのがつく〴〵本意ない感じがする。

夜はおつとめに出た。又かうして皆んなの中に伍せると全くうれしい。やつと氣持

がはれてくる。世の中に完全と云ふものはないだらうけれ共、すくなくとも自分は完全に世間のレベルにのりたい様な感じもした。そして自分は病氣のすべてをわすれた様に考へられた。

勤行の後、天香師のおまねきに帖半寮まででかけた。この行願に參加したもの全部が、數日數回に分れて夜天香師の帖半寮にお茶をいたゞきにあがる譯である。その第一回が今夜で一班に自分が入つた。帖半寮に天香師が行願に參加する者を呼ぶ意味は實に深大であるが、それは帖半寮が空諦である一燈園の六萬行願の出發體であるからとうけたまはる。(くはしくは光百七十一號參照)自分はお茶だけいたゞいて菓子は紙にくるんで持つてかへつた。くらい路を下つてくる時、自分は自分の體にはかりしれない大きな力が起つた様な感じがした。禮堂の脇で建ちやんに會つたので、久濶の挨拶のかはりに持つてゐた菓子をにぎらせて無言のまゝ室にかへつた。

天香師の三位一體論が、自分のむねを支配してはなれなかつた。

三月五日。

自分は或大きな、否、最大の夢に起床した。今日は體のコンデイシヨンもよし、大きな夢の實現にも是非行願に參加しなければならない。屋外は寒さうな雪が名殘のこがらしに吹きまくられてゐる。それを見ても自分の心ははやつた。今朝はおかゆをすすつて急いで仕度にかゝる。看護婦さんが又かいろを入れにきてくれたことは、實にありがたかつた。

「足袋も行願袋に入れて行きなさい」

と杉山さんの御注意もうれしい。早速禮堂へ集つて王雲三昧（オーウンサンマイ）から行願歌合唱に一同の元氣は又ものすごい。謙忍臺の中腹にしもばしらをふんで立たれた天香師の御姿を拜して、心自らをどり身おのづとあらたまる。山を下つて行く行願隊の列を、ありがたい合掌でおつてくれる者は居のこりの當番である。二號橋を渡るころ、もう自分の足

は感じがないくらゐひえてゐた。しかし、心はもう感激にみちてゐる。

今日は高倉六角下ルの日彰小學校を中心とした附近であり、有名な新京極や錦の市場などが中心に入つてゐる。自分は建ちやんのお母さんと組んで午前中は柳馬場を六角から錦まで行つた。女の人と組んで居るせいでもあらうが實に樂であつた。どんどんはかどつた。そして定められた二十數軒も晝くうちにすんで他の應援をした。問屋風の商家が多く便所も比較的きれいで行願にも大變心をよせてくれる人も多いのはうれしかつた。中食前腹が又痛み出したが、火にあたつてどうやら未然にふせいだ樣な感じがする、食後いよ〳〵錦にうつつた。錦は名簿でなく軒並である。堺町から柳馬場までの北側をやつた。心配してゐたほど惡くもことはられないし、親切に飯時でもさせていたゞけたのはうれしい。しかも錦の北側は一般に奥ふかく、便所もあかるかつた。南側は家も淺かつた樣に感じられた。午後は非常に氣がらくであつた。かうして問題の錦市場を何の障りもなく行じられたことは、今度の六萬行願にとつて大きな

收穫であつたのではなからうかと思ふ。これは後聞ではあるが、草場さんの班すなはち第一班は新京極の或所でことはられて共同便所にうつつたさうだ。そして掃除がすんで一同そろつて心經をあげてゐたら、人が黒山の様にあつまつて、中には五圓札をつゝむひまもなく誰かのふところにねぢ込まうとしたさうであるとか。

風花にふかれて、行列が三條大橋を渡るとき、北山にはまだ眞白な雪があつた。自分は實に愉快でならなかつた。

三月六日。

とう〳〵大結成結願の日がきた。もう光泉林の空氣はどことなくはれやかである。寒さは依然として續いたが、皆んなの面々にはどこか知れないうれしさがあふれてゐる。天香師のお顔はいやが上に光をまして、拜する自分達の心もいさんだ。

三條大橋をわたつて木屋町通りをよぎるころ寒さは實にその極に達した。もう足駄

はく足はころ〳〵して鼻緒に指が入らない。まだ静かな木屋町通りは實に寒さが倍加する様にも思はれた。たゞ六萬行願の發祥、否一燈園の記念すべき中村家さんだけは一同おもてへでて自分達を合掌で迎へてくれたのに勇躍して、三條通りの寺町以東を順次東の方へ行つた。一日分の軒數を午前中にするのであるから超スピードである。よく計算して見ても一軒の家に五分とゐられない勘定になる。ことに谷洲町に入ると井戸の水も非常につめたい。しかしさすがにこの邊は天香師の因縁の地だけあつて非常に理解が深い様に感ずるのも何かとうれしかつた。ことに木屋町のつきあたりにあるお寺（名前は忘れたが）は、昨日の法事ののこりだとて半紙につゝんだ菓子包を、三四十ハトロンにつゝんで出してくれた。自分達はたゞ感謝感激のあまりひたすら合掌で拝辭して門を出た。すると門前で天香師以下の二三名に會つた。一同はたゞ合掌して送るのみで一句も口から出なかつた。後できけば、天香師は一番最後に中村屋さんの便所を行ぜられたとか。自分はそれから一二軒殘りを行つて、一同と共に土手町

夷川にある銅駝小學校に引きあげた。あゝ京都に於ける最初の大結成は終つた。自分ははなはだつたなくわづかにその數日間に末尾に連なつたとは云へ、この榮ある最初の大結成に參加させていたゞいたことを心から感謝すると共に、これを以て益〻身のつたなきを修めて共にみ光の元に參ぜんことを冀ふ次第である。

銅駝校でうれしい中食にしたづつみをうち、寒い校庭で天香師のつゝみきれぬ微笑を拜した時、自分の身はさながら、天國淨土にあるをおぼえた。校庭で思ひ出の撮影をした。加茂川の流れは靜かに、寒い北風は吹きすさむけれ共、それはむしろこの樂しいメロデーの伴奏にすぎなかつた。

午後一時一同保さん（陸軍歩兵中尉殿と言はなければならない）の號令で、班別をといて列び、再び行願旗を先頭に同校を出た。北へ丸太町通りまで出て西行した。行列は別にめづらしいこともないが、肅々と嚴かである。

御所の西側にある通用門の前で、一同は腰の帶をとつて着物をながくした。これか

ら御所の拝觀である。自分はこの時にいたつて初めて一燈園のひつぱりが非常に便利なものであることを痛感した。事實自分は東京をたつてからこの方、一着のこの服裝で汽車にものれば電車にものる。林にゐる時でも、夜寢る時でもこのまゝである。(勿論ひつぱりはぬいでゐるが)毎日の六萬行願には紐で腰をからげれば不自由はせぬ。別して尊い禁裏を拜するにもこれで威儀はとゝのふ。自分は普通の生活における數々の着物の必要であるのと考へ合せてみた。汽車にのるのには外出着をき、寢臺車に入つて寢衣にきかへ、朝は早くから洋服をきてくつろげば和服、仕事は仕事着、御所の拜觀はモーニング、それこそいくつ着物があつてもたりない。一燈園流に行くと、これでいさゝかの不調和も不自然もないから全くのうれしい行き方である。

一同は案内の方より一わたりこの御所の沿革、結構、規模などのくはしい說明をきいて東御車寄の前に立つた。美しくそしておごそかな小砂利には淺春の太陽がうすい光線をなげてゐる。自分はひとしきり御大禮の盛儀のさまをしのびたてまつつた。そ

れから月華門より紫宸殿の南庭に出た。自分はかつての旅行に大典後の御所を拝觀したが、その時は特別の結構にかへられ、あまつさへ人いきれのする雜沓の中にたゞ大典のさまをしのんだのみであつたが、かうしてふだんの御所を拝觀すると實に古都らしい雰圍氣と宮居の神々しさを今更ながらに感じたのであつた。こゝで二班にわかれて説明をきいてゐた。一行が集つて、天香師の御發聲で謝恩詞を讀んだ。

「掛卷くもかしこき……」

天香師の聲はあざやかに堂々と、一同思はずこれに和した。それから六萬行願歌がうたはれ、最後に王雲三昧があつた。

「オーウン」

と力強い天香師の御發聲は、かつての御大典に故田中大將が國民八千萬に代つて天皇陛下に祝詞を奉つて後、聖壽の萬歳を叫んだにもまして弟子達と共に力をこめた

「オーウン」

は實に天香師にとつて歴史的な喜びであつたに違ひない。自分は未だ同人の禮を以て天香師に師事しないけれ共、十一年にこの大結成に參加し、將又師と共に紫宸の南庭に玉雲三昧の儀を終つたことは、不肖の身として實に感激にたへなかつた。

それから春興殿、御學問所、內庭、清涼殿などを拜して、おそれ多くも主上の御日常を拜し、大典の盛儀を想ひ、たゞ感激に胸をふさがれて、この雲の上から下つたのであつた。

林にかへつて、一憩するとすぐ湯につかつた。天香師はつゝみきれない笑を御顏に表はして、しづかに湯の中で大結成のつかれを流しておられた。

「馬場さん、いつまでおいでる」

と自分に問はれた。自分は明日一日京都に滯在して、明後日は伊勢參宮のうへ歸京するとスケジユールを申し上げた。それからしばらく戒嚴下の東京の模樣などをそれとなく申し上げて、室にかへつた。晚食は五もく飯を饗せられて、一同したづゝみを打

つた。自分も思はずはしが進んだのはうれしい。

小さな林の子供が二人、

「今夜は、お母ちやんと一緒におぢいちやんのところへおよばれするの」

とうれしがつてゐるのが、いかにもかわいい。

「毎日の御飯が御饅頭やといゝのやけんどなー」

と小さな京都辯もうれしい。夜のおつとめには謝恩詞があげられた。

三月七日。

午前七時半まで一同のねむりは續いた。大結成が終つたと言ふ安心と目に見えない六日間のつかれ、否その用意につかはれた一同の精力、そんなものが一時にあらはれたのであらう。誰の顔を見てもにこ〳〵である。自分の様な門外漢でも、何となくはれやかな氣分になつた。

一、朝のおつとめ。一、朝ごはん。一、十時から大結成の報告式。一、續いて感話會。一、晝食はぜんざいのお供養、そして午後は自由行動で風呂は午後一時からわいておりますとは、預務室から發表された今日の日課である。

午前十時半、式が始まつたころ自分は光泉林の門を出た。式には參列したくなかつた。まして感話會などに出されるのは片腹いたい思ひがした。居れば勿論出される、結局京都行を思ひ立つた所以である。四ノ宮から電車に乘つても、今日は一寸樣子が違ふ。十二錢拂つて乘るのも何だか變だ。三條大橋から北山をながめても氣がゆるんでゐるせいだか馬鹿にさむい。

それからにぎやかな三條通りを六角堺町にある取引先長谷川へ行つた。商賣のことはさることながら、主人もとても面白い。大一番の火鉢をだいて店で六萬行願のはなしを初めた。こゝの家は自分が病氣あがりの日に同班の人がしたことを覺えてゐるので、更に話はすゝむ。二・二六事件の話も出た。やつぱり地方の人間の感想をきくと

ニュースを信じきつて事件を單に血盟團、五・一五、神兵隊等の様にあつさり考へてゐる。自分は入洛以來あまりニュースに接しないが、すくなくとも今度の事件はさう簡單な物では無からうと考へてゐる。京都ものゝ商賣ぶりを見、夏ものの品揃へをしたり、自分は思はず俗界に接した様に感じた。

一時頃になつて大丸の食堂へ中食に出かけた。主人は食堂の窓から京都を說明しようと言つた。

「さむさうやなー」

と又言つた。自分は今日こそ足袋もはいてゐるし、腰からげもなし、まことに暖いと思つてゐるのに、「今日の寒さは又格別や」と又云ふ。めづらしく御馳走にありついて、自分は滿足であつた。

「京都は、はじめてです」

と自分が云ふのを受けて、これから自動車でドライヴすれば、あらましは見られると

云つた。自分は三時半、花屋町西洞院の永田で電話でうち合はせることにして大丸の前で別れたのが二時頃であつた。それから、東洞院を下つて二三軒取引先を歩いた。京都の取引先を數へれば二十軒は下らないのであるが、今度はあまり歩かないことにして花屋町の永田で見たいと思ふ佛書や御經を數十種求めた。そして、

「私のところへ電話がありましたら、もう山科へかへつたと言つて下さい」

とたのんで、電車を石段下までのつた。長谷川主人の好意を無にする譯でもなく自分でも進まない譯でもなかつたが、いたづらに金錢や時間を空費してもてなしてもらふにしのびなかつた。且は自分も報告式をさぼつて出てきたのだから、せめて日のある中に歸つた方がよいと思つたからである。八阪神社の雜沓をこえて、かつて自分の味覺に異常なよろこびを與へてくれたおけら餅をかひに入つた。自分はまだ若冠にして各地の名菓を味ふ力がないけれ共、少くとも京都に於ける餅は京都の名物として將日本の第一級としておすにはぢない様な氣がする。伊勢參宮するに一寸やうかいかとは

思つたが、これだけは買ひたい様な氣がして二包こしらへてもらつた。

林にかへつておけら餅の一つを前林にのこした。夜のおつとめが終つて後、天香師が伊勢同行をすゝめた。天香師は七時の草津廻りでたゝれると言ふ。自分は木津廻りのきつぷをもつてゐる。しかし自分は、

「隨行させていたゞきます」

と有難く受けて、早速回光社で時間をくつた。師は大結成の神宮報告に行かれるとのこと、一行は滿洲の谷野子夫妻、同じく山崎子、淨蓮子の法喜さん、名古屋へ歸られる不倦子である。自分も同行できるならこの上もなく光榮であるから、いろ〳〵時間を合せて、自分が山科發五時十八分に早め、師が八時十六分にのられて拓植で待ち合せることに師のお許をえた。朝が早いので、自分はスーツを印刷場の二階まではこんだ。そして、しばらく回光社で皆んなと雜談した。黃泉さんと奥井さんは會計決算に大童である。

話も一段落ついてから、黄泉さんは自分の室に私を呼んだ。賢太郎、奥井、不倦の三子と一緒にお茶をのんだ。色々な話が出る中に自分もいつか光泉林預務室の雰圍氣の中へ引き込まれてしまつた。賢太郎さんの一昔前の東京の話も面白い。奥井さんのユーモアが一座をより以上あかるくした。「もうかうなつてくると東京へ歸るのがいやになつた」と言ふ自分を「だからもつとゐなさい」と皆んなでとめる。二・二六事件の皮相も、後繼内閣も乃至は俗世的なこと全部が全く關係外にはね出されてしまつた様になつて、自分の心は安らかになつた。十二時頃まで話してわかれた。それから回光社へ挨拶に出ると、こゝでもお茶の會がまだつゞいてゐた。

三月八日。

月明の夜をまんじりともしなかつた自分は、四時半だまつて光泉林の門を出た。自分は何だか知れない非常な淋しさをおぼえた。まだ夜のとばりに四顧暗黑な空にはさ

つきまであんなにさへてゐた月が、西空のくもの中におぼろなかげをしづめてしまつた。山科の街道もながく感じられた。自分はしばらく驛の前で新聞配達がたいてゐたたき火にだんをとつた。三月とは言へまだ春などはどこにもきてゐない様なさむさである。體がぞく〳〵と冷え込んで肋膜がひどくいたむ。自分は、かうしてさむい時に荒行を行つて、歸つてから發病でもしなければよいがと心配でならなかつた。

京都の驛で顔を洗つた。さつぱりとした體でプラットホームを靜かにあるいてゐると、つく〳〵旅と言ふ感じが深い。旅、旅、すべては旅である。古の賢人が光陰は百代の過客だと言ひ、下つて多くの詩人がさすらひの旅をすみかというたのも、或意味に於てなつかしい感じがする。

京都から湊町行の田舍じみた汽車にのつて、つめたい汽車辨に空腹をしのいだ。なき出しさうに曇つた空がほの〳〵と白けてくると線路の兩側には一面の茶畑である。かつて伊勢から京都への旅にも、

「これが有名な宇治茶です」

と先生に言はれたのもこの邊だつたらうし、ものすごいにはか雨に平等院の中に降りこめられたのも思ひ出される。自分は現ともなく夢ともなく、ねむい目をこすりながら「ながいけ」とか「たなくろ」とか言ふ驛夫の聲をきいた。

又木津でのりかへて關西線に入る。紘二郎氏の文章にでも出てきさうな木津川の大庭園を汽車は白煙をたてゝあとさきにかまびすしい。自分は讀書するでもなく、日記をつける譯でもなく、ねむるでもなく、おきるでもなく、ぼんやりと遲い汽車にゆられた。それでなんだか云ひ知れない寂しさを覺えてならなかつた。旅にでも出て歸る時おこる寂しさともことなつた、なんとなくしたはしい樣な、なごりをしい樣な愛着を京都に感じた。それと同時に、東京のオフイスにかへるつらい思ひが胸をふさげてならなかつた。

鈴鹿山脈にはまだ雪が眞白にのこつてゐるが、丘陵性の山にかこまれた上野盆地に

も梅やつばきが春のきたことを告げてゐる様にも見える。拓植の驛で半時間ばかり京都からの汽車をまつた。暖い車内から出てみると、にはかに寒さをおぼえた。

「雪でも降るかなー」

静かなプラットフォームで驛夫の聲がさむさうにきこえる。

京都から待ち受けた汽車には意外にも天香師の顔は見えなかつたが、不倦子が代理に乘つておられた。師は御都合が悪くてとうとうこられなかつたこと、それから師の詫びの意味で私が代理にきましたと不倦子は詳細を私に語つた。しかし自分は大きな失望を持たなかつた。そしてわざ〳〵早曉から出かけてきた心勞も不足でなかつた。たゞ師の御都合の悪かつたのを心殘りとするだけであつた。それより氣の毒に思つたのは、この朝はやく長谷川の主人が光泉林へ自分をたづねてきてくれたとのことである。九時の出發ときいて、自動車をはしらせてきたと云ふ。さむからうとシャツを持つてきてくれたのを不倦子から手わたされると、自分はたゞすまん様な氣がして、又

京都へもどりたくなつた。

不倦子とは龜山でわかれた。かすかに催してきた雪の中を快速列車は辷つた。しかし、それと同時に自分の心はます〳〵かすかになつて行つた。そして、この靜かな表伊勢のかざらない靜かな風光が、自分の心にいさゝかの慰安をあたへてくれる樣なよろこびを感じることが出來た。

春の重さうな雪がどん〳〵ふる中に外宮に參拜し、更に、電車を利して內宮に詣つた。自分は八年ぶりで參宮できたことをまづ光榮に思つた。それで今度の參宮がことに意義深い、自分の心のたてかへをちかふ樣にも思はれた。たゞ自分は一心に祈つた。ふりすさむ雪、こみ合ふ人々（この日は日曜であつたせいでもあらうが）自分は正面をそれてたゞ一心に祈つた。そして、その間に般若心經を續けて幾卷も〳〵となへた。それが自分の祈るすべてであつた。心にはたゞ眞白な神々しい純白色が現れたのみであつた。我にかへつた時は非常な滿足な感じにうたれた。そして益〻甚だしく

ふつてくる雪の中を、このすがすがしい感じにうたれながら神域を去つて、更に車を走らせて伊勢電鐵の驛にむかつた。

形の大きいぼた〳〵とした春の雪はいよ〳〵ふりすさんだ。電車があの豐穰な伊勢平野の中央を貫いて走つて行く中に一面の田畑、散集する家屋、或は山と言はず林と言はずたゞ白皚々のおそろしい様な時ならぬ點景に、ちつとも降仕度をしてゐない自分の心は、ます〳〵かすかにいよ〳〵さびしくなつた。

二時半頃自分はこの思ひもよらぬ大雪の中を和田甚の家にたどりついた。白子の驛から草履でぬかるみを歩いてきたので、もう腰から下は泥ばねが澤山あがつてゐる。丁度おやぢさんはすみけすりをやつてゐたところで、早速自分を上段の間に通した。そこにはモラロヂーの神殿がおごそかにかざられてゐて、壁間には道德科學のモットーがいろ〳〵かゝげてあつた。主人は、いろ〳〵自分の訪ねてきたことを歡迎顔にもてなしてくれる。今日はあいにくの日曜で全部職人を休ませてゐるから、一晩とまつ

て明日でもゆつくり工場を見學してくれないかとすゝめ頻に云つてゐたが、自分の豫定の變更できないことを見てとつて近所の職人だけを三四人集める樣に云ひつけた。そして器局の中から茶道具などをとり出して煎茶をもてなしなどしてくれた。

それから油煙だらけのコートをきて倉の中へつれて行かれた。倉の中には小さな棚をつくつて墨の型がいつぱいに入つてゐる。曰く「これはあなたの店のかながき墨の型です」曰く「これは紅花墨の三丁形です」といろ〳〵な型を出してはづして見せたあげく、

「これがまあ墨屋のしんしやうですね」

と言つて笑ひながらほこりになつた手をはたいた。膠もかごに入つて幾種類も〳〵あつた。油煙をとる油の滿ちてゐるをけも見た。要するに墨製造を見學する豫備知識である。又室に歸ると飯の仕度が出來てゐた。四時頃の飯は時間はづれだが一寸たべてくれと言はれて、自分も腹がすいてゐたせいだか食指が動いた。伊勢海の魚のうまさ

を自分ははじめて味つてみる様なうれしさを感じて、舌づつみをうつた。

食後又例のコートをきていよ〳〵墨の製造場を見ることになつた。先づ入つた室には攪拌機が廻轉してゐてにかはと油煙をねり合せたものをまぜてゐた。それから一人の男が半裸になつて、このかたまりを大きな板の上で又更によくねりかへしてゐた。その時こまかくされた龍腦がたくみにこね入れられるのである。それを次の室で大きな平板の前に坐つて體の下に入れておいて少しづつ出しては、はかりにかけてそれを丁寧にこねてはさつき澤山見せてもらつた型の中へ入れるのである。三十分くらゐたつてから形を出すとこれがきれいに出るのださうだが、自分に見せる爲に出して見せるのは多くは表の文字などがくずれてしまつた。これをきつちり箱につめておいて、數日してやゝかたくなつたものをさつき自分がきた時おやぢさんがやつてゐた様に稜線をかんなでけづりとるのである。それから乾燥室に入つた。かくて稜線を修整された墨は、この室で生灰の中に一週間乃至一月間の乾燥をさせられる。それが非常に手

のかかるものである。ビール箱位の木箱の中にうすい生灰をひく、それにぴつたり入る網を入れて、その上に稜線けずりのかんなをかけた墨が一つづつ一段ならべられる。その上から生紙をしいて又灰をかける、それから、又あみをのせて前のことがくりかへされるが、灰は常にとりかへなければ、十分水分をとれないさうである。その室で他の一人がわらですみをあんでゐた。その二階へあがると、かうしてあんだ墨が天井から澤山さがつてゐる。勿論灰だらけで名前も何も全くわからない。かうしてしばらく前の工程くらゐの日數は乾されるのださうである。薄ぐらいこの室の中は、こととにかびくさくものうい。これからすみは灰をおとされて、はまぐりの貝でみがかれたり、金文字を入れたりするのである。それから金巻になると又本金箔をおいたり、櫻がみにつゝんだりして桐箱に納められたりするのださうである。それはこの附近に住む女子供の内職もあれば、上物になると靜岡邊までしあげに出すこともあるさうである。自分が工場を出る頃には、いつの間にか顔や手がすつかり眞黒になつた。それ

から主家の二階には仕上つた墨や、みがきかけのすみなどがうづたかくつまれてあつた。墨は最初の工程から出來上るまでにはずい分われや傷が出てのけられるさうである。墨は太陽の光線をうけることは禁物なので、すみの製造はがいして薄暗いうつとうしいところでされるのである。それから風呂がわいたと告げられて、風呂につかつた。震災前のやき芋屋を想像する様な特異の風呂は自分の興味をそゝつたが、如何せん坐りきつて、ひざ口がいたんでゐるせいかしみて〳〵入れなかつた。足を出して體だけつけて早々あがつた。

七時頃又晩の膳に向つた。もうさつき程の食慾はなかつたが、それでも名物のかきやえびや又は白味の魚などをあれこれとつまんだ。中にもかきのフライとえびの茶碗むしはうまかつた。それから商賣用の墨や、試用の代用米やスカーレットなどを包みに入れた。

「これは白子の名物ですが一つ」

と言つて菓子を一折その中へ加へられた。自分は思はぬところでかくもてなされて且は恐縮でもあり、且はうれしくもあつた。ほてり氣味の體を庭に出すと、さつきやんだばかりの空には月光が美しい。黒くわだかまつた様な雲が、西の方をさして足早にうごいてゐる。

「はれまして誠に……」

と言ひながら主人はお茶をすゝめてくれた。

八時をやゝ廻つて、迎への自動車にのつた。お主婦さんは門口までおくつてきて、

「又夏にどうぞ」

と言つた。伊勢海の夏は又格別だらうと自分は思つた。自動車の中からわづかに點ずる灯をたどつて、白子の町の説明をしてくれるのは主人である。この和田甚の家は工場などの關係から、町のはづれにあるのださうである。「道でもきれいなら、一緒に白子の目抜きでも御案内するのだが」とつぶやいてゐた。

おやぢさんとは白子驛のホームでわかれた。やみを貫いてはしる夜の電車には地方の人々の顔がねむさうに並んでゐる。自分は又わが身をかへりみて一人旅のあはい旅愁を感じない譯には行かなかつた。はげしくゆられる電車の中で、自分は初めてきく驛夫の驛名に一寸引きとめられる様な思ひを感じながらいつか四日市の驛についた。

九時十一分の東京行にのり込んで、初めて旅らしいわびしさをけすことが出來た。あすの朝はあの思ひ出の東京驛につけるのだ。あの日着劍の戒嚴令下の兵士達にまもられてゐた東京驛は、どうなつてゐるだらう。自分は定められた寢臺に入つて、身輕になつて外の見えるところに坐つた。三等車は滿員で入れなかつたが、寢臺車の中は至つて靜かである。まだ數人しかゐない。自分は暫しの瞑目を續けて、初めて回想にふけつた。東京を出てからの八日間、自分の身の廻りにおこつた大きな波をつくづくと考へ直して見るのもうれしかつた。行願もうまくいつた。京都の一日も愉快であつた。伊勢大廟の參拜も滿足な思ひがする、墨製造の見學も大きな收穫であつた。窓外

には黒くうき出した磯なれ松の美しい彼方に、伊勢海の波にさえた月光がうつつて銀波又金波を美しくをどらせてゐる。數へて見ると今夜の月は十五日だ。自分は何と幸福なことであらう、はからずもこの良夜を伊勢海の波にうつすとは。

名古屋ではまだ寒いホームに出て、お茶をのんだ。昨夜ねむらなかつたせいかバカにねむい。あついお茶がたまらなくうまい。

三月九日。

五時すぎて横濱で目をさました。さすがによく寢た。自分はあまりこんなところではねられないたちだがめづらしくよくねむれた。少しまだ頭が重いくらゐだ。外には又ものういみぞれがふつてゐる。横濱の港も神奈川の街も、まだ靜かにねむつてゐた。自分は身のやうやく東京に近づいたことを感じると共に、一種の寂しさを感じた。それはとりもなほさず一燈園生活の仰望であり、まさしく自分の心の革命であると思つた。

四滅集

一　序にかへて

數年ほど前からの病が今日此頃に至つて一段と激しくなつてきた様な氣がするので、今年の夏はあこがれの山をすてゝもつと樂な方法で旅行を試みようと、先づ年頭からの希望の奥日光縱走のプランをすてた。

あれやこれやとあさつた末、とう〳〵淺間丸にのつて神戸まで洋行の氣分を味ふことにきめたのが八月のはじめであつた。かたづけてもかたづけても、出てくる仕事にもしや又出そこなふと大變だと考へて、早速船切符を求めてしまつた。

旅にはかなり自信のある自分にしても船旅にはほとんど經驗がないが、どうせ一日かそこらのことだから、どつち道なんとかなるだらうと自分にしては珍しく案外あつ

さり高をくゝつた。郵船の知人や、船旅に經驗のあるS氏などはなにかと世話し勝ちであつたが、自分は案外馬耳東風であつた。たゞ一言、

「そのまゝ上海まで行つてきなさい！」

とおだてられたのは、なんだか旅行道樂の自分の心に強いむちをうたれた様な氣がして、一寸人さし指が動いた。

自分は、こんな様な豫定をつくつて近くの者に見せた。

一、十四日午前十時頃、丸ビルを出て横濱の埠頭に行く。そして淺間丸は正午に出帆することになつてゐる。

一、十五日は紀伊水道の日御崎あたりで夜があけて、九時とかに神戸に入港するさうである。稅關やなにかのことでおくれるが、十時半位までには三ノ宮の驛へ着く。それから大阪へ出て堂ビル・ホテルに宿をとつて、輕くなつて堺の梅榮堂(線香製造)へ行つて、香の話をきいたり製造を見たり、などして見よう。堺の見物

はそこにまかせる。夜の大阪で自分はその繁華を味はうなど考へて見た。

一、十六日は午前中に京都へ出て、京都の取引先を歩いて見よう。夜は光泉林で、温故知新のうれしい情味にひたらう。それから夜十一時頃の汽車で、一路東京にかへらう。

二　私の紀行文

自分の旅すきはかなり前から、色々の方面にその足あとを印したが、いつもかならずそれについてのわすれな草を草してきた。人々は紀行文の破門者であると言ふかも知れないが、自分は元々紀行文についてふかいはつきりとした觀念を持つてゐない。つまり自分のは旅の或一面の記錄にすぎない。時にはその美しい、男々しい、雄大な景色を寫すこともある。時には樂しい、なつかしい旅の情を、縱からともなく橫からともなく叙すこともある。時にはこまやかな、愛らしい、山村の人情を讃へることも

ある。しかし多くは自分の行動に對する細い記錄のみを述べることが多い。つまり自分の紀行は、

「何時に起きて、何時にねて、いつ御飯をたべて、いつお湯に入つた」

などと、昔から識者の忌む一番最下等な旅日記である。だから冗慢に流れて洗練さがたりない。語が多すぎてかへつて感激がすくない。つまり土佐日記と更級日記を比較すればわかる(自分の紀行文が上手だと言ふのではない)。自分の古い紀行をとり出して讀むと馬鹿になつかしい感じがする。多分他人は眠くなつて讀めまい。

しかし自分は最早こんな紀行でも、かきたくても書けない様になつた。病にさはられながら、はげしい刺戟を求めて、毎日つとめに出る。よせばよいと思ふのだが、なんだか目先のことにとらはれて働きたくなる。實際休んで一日ねて見ると、たしかに體の疲れは減少するが、氣持がうつとほしくなつて色々の妄想が起り、かへつて神經がつかれて疲勞が增すことになる。結局體をつかつた方が、寧ろ病氣にはよいとも思ふ。

そんなことで一日中體を疲れさせてゐるのだから、店だけのつとめでぎり〳〵である。朝食も夕食も皆ふとんの上までもつてこさせる。たまに湯にでも入ると、翌日の午前中くらゐはどうしてもおきられない。殊に昨今の様な暑さだと、晝食などがなんだか進まない。なにか味のこいものが非常にほしくなる。どぢやう汁やトンカツなどは、ことに好きだ。そんなせいでもなからうが、この旅行から後すこし腎臓が悪いやうだ。

旅行と云へば紀行の話がのこつてゐた。つまり今まで述べた様な體の調子だから、紀行はおろか、私用の手紙一本かけない。

三　淺間丸の客となつて

淺間丸の客となつて、はじめて世間も廣いものだと思つた。昔からその引合に出される井の中の代物さへ大海はしらないのだから、自分などが太平洋を知らないのも別に不思議はないけれ共、大いに得るところがあつたと言つても過言ではないと思ふ。

先づ第一におどろいたことは船客の中に日本人の少いことだ。それは日割や、航路その他色々の關係のあることだが、なんだかアメリカ人が馬鹿に多い。支那人もかなり餘計乘つてゐる。しかし日本人の數は、この各〻よりも少なかつた。もつとも自分は大枚ふるつて二等に乘つて見たので、一等二等のものが多く目にふれたからとも言へやうが、自分はなんだか非常に國際的な感じがしてならなんだ。

第二には船は非常に樂なものであると感じた。自分などは横濱、神戸間の汽車のそれと較べるのだから、船旅の豫想外に長いことなどは考へるすべもないが、體にいくらか欠點のある自分などは、こんな事が馬鹿に敏感になるのである。

第三には等級の區別が非常にはつきりしてゐると思つた。ことに三等と二等とは非常に段が大きい様に思はれた。この點から言つて、船の設備とか美麗とかの點をあげなければならないが、こんなことは郵船の船客課の方がよくをしへてくれると思ふ。

第四にはお茶のまづいことだ。お茶の時間に出すお茶の外に朝・晝・晩と食事の度に

お茶を持つてこさせた。自分はこれが本當の紅茶の味かと思つた。しかし一寸考へなほして見ると東京あたりのまづ一流（と言はれる）料理屋で食事の後に出すお茶（普通の日本茶）などはきまつた様にお湯くさいものを出すことを思ふと、あながち苦情も言へない。しかし、お茶の時間だけは少くとも日本で例へば玉露や薄茶などを進める様にもつとお茶らしいものを出してもらひたかつた。せめてもの長旅の人への慰安であると思つた。自分は非常にお茶ずきで、子供の時からがぶがぶとのんでゐる中いつの間にかそのこまやかな薄茶の味、日本人の性情をたくみにゑがき出した最も代表的な味のエッセンスの様な玉露の味、さては紅茶の香りに夢はヒマラヤの奥ふかく、ダージリンの彼方に豊な情をかもし、又現實生活の快樂を美しく又樂しく引き出した様なカフエンの香りなど、自分はお茶によつてこの澆季溷濁の世の中が非常に樂しい様な感じがするのである。

第五には上陸が非常に面倒なことである。急ぐのなら汽車にのるがよい。横濱から

乘つて來た自分に、

「パスポートは？」

と誤つてたづねる御役人も、このところばかりは洋行の氣分滿點である。

四　下町に住つて

私はこの頃になつて、自分が益〻都會の人間になつた樣に感じてならない。自分の父や母は古い傳統につながれた殆ど純粹の上州人であつたのだが、私達五人の全部の兄弟は、皆んなわづか十年餘り住んだ牛込の生れである。今では、とう〳〵私と四つ年下の妹の二人になつてしまつた。

私は四歲位の頃から、母の病氣の爲に湘南の平塚に住むことになつた。しかしこの生活もあのおそろしかつた大震災の爲に無殘にもふみにじられて、私は上州の方で學校にかよつた。こゝに一年を送つて、私の生活はとう〳〵東京の下町にもどつてき

た。それ以來今までにもう十數年を過去つた私の生活は、この下町で續けられたのである。中學校はせめても郊外へ出でなるべく澤山田舍の生活になりたいなどと考へて毎日々々下町の私のすまひから杉並の學校までよく通つた。今から考へて見ると、私もこの頃にもつと〳〵この田舍の空氣を吸つておけばよかつたとつく〴〵感じることがある。もう中學を出てから二年以上にもなる。毎日下町の小さな家から、丸ビルの電氣に照らされに通ふこと殆ど二六時中である。つまり私の生活が都會的になるにしたがつて、私の私生活はも早どうしても都會的にならざるを得ない様なことになる。それがこの五月に行はれた徴兵檢査以來、私の心の奥から非常に強い力を以ておし出してきた様にも感じられる。下町の空氣は、私からあの勇しい壯大な氣力をつまみさつた。彼は又、私から大きな鬪爭心を切つて行つた。名譽慾、發展慾、生活慾などすべての人生的慾望も、これにともなはれて逃げさつてしまつた。

私は空になつた様な私自身の體をながめて、そこにかすかにもえてゐる小さな身の

廻りの慾望を見た。さつぱりとした浴衣がたまらなくうれしかつたり、新しいお茶を口に入れる快味や細いデリケートな味の食物などを知る様になつた。この事實の一半は私の體が漸く惡化してきた爲でもあらうが、又一面には私の生活と言ふものが、もうすつかり江戸三百年の下町氣質にとけ込んでしまつたとも言へる。

とも角、私は枯淡に枯淡に、淺く〳〵生活して行きたい様な氣がしてならない。

五　海へのあこがれ

私の海へのあこがれも、とう〳〵實現した。これで私も、海と手をつながつて遊べる様な氣がする。これからも、海の生活は續くことであらう。

しかし旅を終つてから、靜かにそのあとを考へてみると、まだどうしても海に對する認識がたりない様な氣がする。友達になつて樂しく自分の情を述べる様な美しい海は、まだ未知の夢の様な寶庫の中に祕められてゐる様な感じがしてならない。あの荒

れくるふ大海の鬼神の如き、夕なぎ遠く落日の慈母の如き、さては運命的な龍巻の男々しさ、夢現的な北海の氷山など、見たい、知りたい、感じたいと私の想ふ海は、まだまだ私には遠い〳〵夢の様な感じがしてならない。

私の海へ〳〵とあこがれる氣持の、やうやくとびらがひらかれた様だ。

六　訃報

順君の意中の人の一人に新澤と云ふ娘があつた。それがこの正月の一日に他界してしまつた。私はこの訃報をきいて、かつはおどろき、かつは哀悼の意を表した。しかしそれと同時に順君の口から、それにもましたもつと〳〵悲しい報知に接したのである。その娘は君よりも二つか三つ年が上であつた。永く胸の病にかゝつて病床にふしきりで、その頃にはもう酸素吸入もからうじてきくと言ふくらゐに、よわりきつてゐた。その娘に四つばかり下の妹があつた。妹は姉さんよりもずつと容貌も悪く、學問

も進まなかつたさうである。この血をわけた妹が順君の小指をくだいて、言ふことの出來ない運命的な宣告を行つたのである。

十二月つごもりの夜、明日はお正月だと喜び廻つてゐた妹は、もう除夜の鐘もつき終つた頃、明日はうれしい晴衣をきて一年の幸福を祝はうと風呂に入つたさうだ。あまりうれしかつたせいでもあらうが、急に風呂の中で心臓痲痺を起して、八方手をつくしたがもうことときれた體は、如何ともすることが出來なかつた。妹の訃報はいつかもれて、生死の境にさまよつてゐる姉の耳に入らずにはおかなかつた。訃報の至ると共に、彼女はこの世の人ではなかつた。

私と順君は、丁度その三ケ日を箱根の或奥まつた温泉の客となつてゐた。

「僕は何だか言ひ知れない程むなぐるしいぞ」

と順君は、温泉につかるたびに不安さうな顔をして言つた。毎晩、寝どこの中へ入ると、きつと新澤の話が出た。

私はこの報らせをきいて、たゞ自分の耳をうたがつた。

世の中にかなしみの種類は多いだらうけれ共、かうした二人の姉妹が、續いて一日の中に二つの原因によつて他界したと言ふことは多くあるまい。私は常に或大きな感激の中にいつもその身をおきたいと考へてゐるけれ共、かうした悲劇に對しては、私は大きな反省をうながされることがある。私達は、それにつけても一日々々をつゝがなくおくれたことに對して感謝すると共に、かうした悲みに沈んでゐる人に萬腔の同情をよせなければならないと思ふ。

七　木屑錄を讀む

數年前、漱石先生の十七回忌として、その夫人より贈られた木屑錄を、このころ又一寸ひもといてみた。勿論それから何か目新しい記事をとり出さうとか、何かそれからぬき書きしようとか、そんな大きな考へも持つてゐなかつた。たゞ日頃敬慕する故

先生の若い頃の文章が、なんとはなしに慕しくなつた。先生がこの文を草されたのは明治二十二年の九月卽ち二十三歳の時の作であるときいて、いよ〳〵自分が年をとることがこはい様な氣がしてならなくなつた。私もあと丁度二年たてば先生がこの文章を書かれた頃になる。しかも自分には何のなすこともなく、何の製作慾もない。勿論先生は、文學の泰斗であり、私は市井にその食を求めて鼓腹擊壤する凡夫であるからむしろこれを較べて見るのが野暮な様な氣もするけれ共、私も中學に通つてゐた頃までは漢文の才を以て身を立てようとひそかに期し、その機會の到るのを待つただけに、この木屑錄を見るとなんとなく心にうれしいものがあり、且は自分の志が半でくだけたのを慙ぢ、又自ら嘆ずるのである。

先生はこれより以前志を漢學にたて、四書五經は勿論のこと諸子百家の傳を誦し、唐宋の數千言はこれを深く愛し、これを以ておのが文才を勵まして刻苦の業をはげんだのである。然るに先生は高等中學に進み英文を學ぶに及んで、更に意をあらためて

英文を以て大著述をする方針を定めて以來、今まで、心念かけて精進した漢學を全く斷つてしまつた。その後數年卽ち明治二十二年頃、正岡子規と相知るに及んで、子規の創作的態度は先生に又大きな刺戟を與へ、先生の漢文熱を動かし、遂に先生をして木屑錄の名作を發せしむるに至つた。自分は先生のこの處女作に對して一句の讃辭を呈することは出來ないけれども、先生のこの大作は漢學者漱石としての芳名を千載に傳へる實に濫觴であつた。

先生の文學上に於ける名聲は、歿後二十年の歲月を閱していよ〳〵明かに、いよいよ美しく眞の先生の愛好者によつて輝いてゐるが、しかも先生の漢文學上に於ける製作は、かくして木屑錄によつて開かれたのである。先生は二十三歲の若冠を以てよくその第一步を印したのである。

× × ×

私はかつて、漢文にやゝ小さな光明を發見し、更にこれを以て近き將來大いに斯界

に勇飛しようと、粗雑なしかも大きな希望をいだいてゐた。そして日々、或は課業の餘暇ある毎に常に若干の漢文を習得することに大いにその力を用ゐてゐた。しかし生來の飽癖と、加ふるに意志の薄弱とを以て、遂に業をなすことなく空しく自失した。時に自分は青衿をしりぞいて、父祖の生業たる商賣の路についた。しかしその頃はまだ漢學に對しての志をもち、劇務の餘暇ある毎にいさゝかの文を草し幾巻かの漢籍を通讀することが出來た。しかしビルディングの非衞生と商賣の劇務とは遂に自分の生來の虚弱な力に餘り、再び健康體に還り得るや否やと自分で自分を疑ぐつてみた。毎日業務には全力をあげてつくすべく、もう漢學だ、文學だと言ふ氣力さへもなくなつた。そしてもう全くの無氣力な不活潑な人間となつて、毎日の業務をいたづらにくりかへすのみで、もう何の志も持ちたくなくなつた。時々行ふ旅行でさへも、もう實地見聞をひろめるとか、浩然の氣を養ふとか言ふ若々しいうれしさはなくなつた。今生の思ひ出の様な感じがすることもある。

× × ×

このころ、南風を呑吐する涼しい松川居で木屑錄をひもといてみると、なんだかいかにもなつかしくなつてきて、又自分は空想に漢學を修めて居る様な思ひがした。ただ文學的に青史に香らせることが出來なくとも、自分は自分としての新しい生涯を發見し、そこに自分の獨特の進路を確保することが出來る様な氣もする。勿論、漱石先生は一世の大宗であり、古今を通じて傑出せる人物であつて、我々少年輩と日を同じく語ることは出來ないながら、先生の木屑錄のなるや凡そ二十三歲、自分のこの稿を草するは二十有一年、或は以て喜となすべきか！

八　文學に志した頃

かなり以前、私は小學校の通信簿をつく〳〵とながめたことがある。丙こそなけれ甲は數へる程しかない。あとは乙の羅列だ。たてから見ても横から見ても（つまり課

目別にしても學期別にしても)全甲や全乙と言ふものは殆どそのかげを見ない。だが、たゞ一つれんめんとして六ケ年間甲をつゞけたものがある。我が最愛の綴方がそれである。中學に入つてからの作文をそろへてみても、皆優の赤印がつけられてあつた。私が何が目的か、何が文學か? まだこんなことも知らない中學の初期において、すでに原稿用紙に文章をかきつらねることが大すきになつた。

中學の二年生の頃、白楊會となづける文學グループを組織して私は同志をあつめて、いろ〳〵とその方面に自分の力をそゝぐ様になつた。私の文學に對する愛好も、こゝに至つて初めて花をさかし實をむすんだ様に考へられた。勿論私達がその頃に組織した會は、まづ以てジャーナリズムを多分に含んだインチキ文士の會合であつて、それから何を益するとて、かへつて學校の風紀係や學級主任からなんとなく壓迫されてゐた様な感じがした。しかし私は文章を書くことは昔から好きだと言ふ強い自負心があつたので、他人からやかましく容喙されても、かへつてそれが何かと自分のこやしに

なつた。廻覽雜誌や座談會などもやつた。しかしまだ〳〵私も體が達者な頃だつたから、蹴球や野球をやつてゐる方が、かへつてうれしい様にも感じた。

私が三年生になつた頃上級がストライキをはじめた。何でも學校の校友會である櫻友會と言ふのが、會計がはつきりとした決算をしないと言ふのが、その理由らしかつた。つまり櫻友會なる美名のもとに、その費用をあいまいなことに融通してゐたのである。とう〳〵その火の手は學校全體にひろがつて、私達のグループにもこれに手を加へるものが出來た。仲間のTやSはその得意の文章でガリ版に檄文を草したと言ふかどで、放校を命ぜられ、その上白楊會も會合相ならぬと、私は教員室で言ひ渡された。もうかうなつては解散も同様だ。私は別にかなしくもなかつたが、たゞTやSが氣の毒でならなかつた。

四年生になつて櫻友會の中に文藝部（又は會誌部）と言ふのが出來た。私もこの部の誕生と共に部員の一人に加はつたが、もう私の文學的態度には大きな轉換期が到來

してゐた。私は中學のはじめから好きでたまらなかつた様な漢文の道が、そのスト事件などの爲に急に開けてきた様な感じがした。もはや私は漢學に對する愛着が最も強かつた。十八史略や日本外史ももうこえて、そのころから文章規範や八家文讀本がすきになつた。かうして私の生活態度も非常に變化してきた。

この頃から私は作文をかく態度に二重人格の様なものが出來てきた。文藝部や作文の先生に出す文は、なにがなしに本當の自分をゑがき出してゐない様な空虚なものであつた。たゞ定められたページを正直に文字でうめた。しかし人間の人格を反映しない文章は白紙に等しい。そして自分は自分で、少なからぬ文章を作つた。それは自分の人格の赤裸々な反映であり、自分の内的生活のつまびらかな描寫であつた。しかしそんなものは文藝部の文士にはわからないし、作文の先生には、くさゝれる教材にすぎないと思つたから別に發表もしなかつた。

私の漢學に對する光明が益〻ひらけてきたと前に述べたが、丁度五年生の夏休みの

時「六書について」と言ふ夏期宿題が出た。私はもう一切の宿題などなげ出して遊ぶことにこれ努めてゐたのに、これぱかりはよくやつた。とう〳〵私の「六書について」は、全學級を通じて第一等の譽をになふに至つた。これより先私は二松學舍か大東文化學院に進んで漢學を專攻しようと志した。しかしそれも單なる漢文の中學教員養成の域を出ず、私の漢學に對する人格的專攻と趣を異にし、あまつさへ私はこの夏光泉林にその淨業をみて學生々活の道に合はざるを知り、ついに退いて市井にその業とする商賣を營むに至つた。かくして私の文學生活の第一期は終つた様な氣がした。

九　詩と田の作り方

「詩を作るより田をつくれ」

とは誰が言つた句か知らないが、實にありがたい當を得たものであると最近つく〴〵感じさせられた。

私はこの語をはじめて聞いた時には、なる程と思つた。その時は要するに單調な農業の生活は、詩や歌を詠むと言ふ文化生活以上のものであると思ふ解釋を下した。しかし、そんなことを言うても、我々の様に都會に生活して文明の最尖端を驅使して産業に從事して行かなければならない人間は、どうしてこんなのんきなことが言つてゐられやう、もう「田を作る」といふことは、ありとあらゆる文明を完全に驅使して産業にはげめと言ふことに解釋を下さなければならないと思つた。それと同時に「詩を作る」と言ふ語に對しても、一つの定見を試みたのである。詩を作ると言ふことは、つまりペンなど持つてのら〳〵してゐると言ふことになる。前に思つた考へと丁度一回轉してゐる譯だ。

或日、私は他人から、

「お父さんの様に畫を大分おやりでせうな」

と言はれた時、卽座に、

「詩を作るより田をつくりますよ」

と、かるく身をかはした。勿論自分は非常に消極的の意味で答へたのであるが、その人は『えらい金まうけでもする様だなあ』と思つたかも知れない。そんなことを思はれては大變だ。

十　はじめて見る大阪

私は今度の旅ではじめて大阪へ行つてみた。あまり自慢ではないけれ共、私は大阪と言ふものが關西に於ける東京であつて、私が東京の中心にすまつてゐるかぎり大阪などと言ふものは見なくても想像し、ゑがき出すことが出來る様に考へられてゐた。それで私は京都へは度々出かけるが大阪へはよう出なかつた。ところが私は今度大阪へ行つて見て、世間も廣いとつく〴〵思つた。二十歳をこえた東京の丸ビル・マンがはじめて大阪を見てたまげて大きな口をあけてぽかんとしてゐる中からぽつ〳〵語り

出した大阪の描寫は、大體次の様である。

私が大阪の驛へついたのが、もう十時も大分廻つてゐたらう。海からあがつてきた自分には、とても暑くてたまらない。もう阪急デパートも堂ビル・ホテルもない。目を見まはす度に汗がしたゝる様だ。私は矢庭に地下鐵へ入る名案を考へ出した。辛うじて地下鐵に入つたが、かへつて人いきれでくるしくてたまらない。大阪の人間は、どうしてみんな熱もちなんだらうと一寸あきれた。地下鐵の女車掌も東京あたりのバス・ガールから見るとサービスが明朗である。まづ淀屋橋とよんだ、次に心齋橋と言ふ。次に口をとがらせて黄色い聲を出して本町とさけんだ。「ほんまち」とは一寸讀方が何かの重ねものに似てゐる、さう言へば船場も妙だ。高島屋で、まだ午には早いが飯をくつた。食券賣場ではトンカツを食ふつもりで入つたが、坐つてみると、

「こゝは和食です」

と斷られた。やむなくまむしにかへた。眞鍮のパイプで給仕の歩道とお客の歩道がく

ぎられてあるのは一寸大阪式かと思つたが、なんだか往年の須田町食堂を思ひ出されてうれしくなかつた。まむしとは東京のうなぎ丼をかさねた様だ、つまり二階建に出來てゐる。五錢あまつたから、あと五錢加へてソーダ水をのませろと言つたら、足し前は不用だと言つてなみ〳〵と量の多いものをもつてきた。大阪はものが安い。五錢持つては東京のデパートでは通用しないだらう。南海の出る難波の驛は實に繁華なものである。震災後の上野驛の様な感じがする。汽車でなく電車だから尚更活氣がある。船の中でボーイに新聞を求めたら、船の中で發行された横がきのを渡された。渡されたがさて讀むことも出來ず、ねまきを包んで稅關を通つた。新聞をかつて堺行の電車にのり込んだ。急行や特急には冷房車がつなげてあるのにはおどろいた。さすがに大阪は西の都だけに西洋の文化が早い様に思つた。日がさす時は冷房車はカーテンが引かれてある。その上自分も新聞がめづらしくて夢中で讀んでゐたから、外が一寸もわからなかつた。なんだか妙な所で、こゝが堺だとおろされた。場末の様なところをう

しろから日にてらされてぽこぽことしたほこり路を歩いた時は、いさゝかこの世を超越した苦しさを感じた。

梅榮堂へ着くと、すぐ奥へ通されてはだかになつた。もうどうしても、はだかになつて扇風機にでもあたつてゐなければたまらない。それサイダーや、それ氷やとはこばれて、とも角一寸落ちついた。

雜談に一時間も費したらう。それから飯を出されてビールをつがれた。實を言ふと私は酒と言ふものに一寸手がつけられない様な氣がする。たまには酒ぐらゐに呑まれてたまるものかと言ふ氣になつて杯をかたむけてみるけれ共、どうも後くされが惡い。頭が二三日ぼんやりして妙にねつを持つた様な氣がして仕事が手につかない。理由を說明してコップをふせる。それから老主人が得意の香の話をする。曰く「タニ」曰く「ドロ」曰く「六國」なるほど聞けばきく程面白く興味はだん〳〵のつてくる。雇人に命じて床柱の様な沈香が庭先にはこばれた。何でも二百斤近い目方があるさう

である。白檀の大木などは何本もある。六十をこえた主人は、あれこれとさすがに香のことについてはよく知つてゐるやうだ。得意になつて説明も至つてこまかい。無理に飯をすゝめられて、若主人と工場へ入つた。工場と言つたところで原料の調合は祕傳とあつて見ることは出來ないし、たゞその調合されたものを動力で攪拌するのみである。それから、壓搾機があつて、こゝでまぜられた原料を上から壺の中へ入れて下の線香の穴へおし出すのである。それを非常に體のしなやかな男が、手ぎれよく板にうけて竹の篦でそれを切るのである。その體の動きを見てゐると實に面白い。動力をかけた機械がかたんかたんと音をたてるのに合せて首をたくみにふりながらうける。そのコントラリズムは私をしていつまでも〳〵立ち去ることを得ざらしめた面白さである。寶塚の女達が面白い音樂に合せて足や手を動かすのと、何等かはることはない。前者は十九世紀がもたらした産業革命の勞働行進曲であり、後者は二十世紀がもたらしたジャーナリズム舞樂の歡樂譜であるだけの違ひだ。それから乾燥室や仕上工

場を見たが、いづれも今日はお盆休なので全部休業してあつた。私は三月の關西行で墨の製造を見學し、八月のこの行で線香の工場を見た。工場の感じや機械の据ゑ方などいづれも相似たところがある。墨と線香は共に我々日本人の家庭生活に必要缺くべからざる重要品であり、共に人生に益する大切な品である。しかも共にこの製造を見學し得たことは大きな喜悦であり、大きな收穫であると思つた。

午後四時頃になつて貸された白絣の涼しいいでたちになつて、若主人と二人で迎への自動車に乘つた。それから仁德天皇の御陵に參拜した。二千年の遠い〳〵美しい夢が、私のうれしいなつかしい心持に映つてきた。そしてあのやさしい仁德をたれ給うた慈愛深い天子樣が、今でもこの地に神しづまりましておいでになると言ふかしこい想ひ出が、自ら私の頭を傾してゐた。この御陵の大きさは、實に日本の山陵中第一位を占めてゐると教へられた。

自動車は再び西へ下つて美しく鋪裝された紀州街道へ出た。それを南に走ること數

分、道は平坦にして自動車の進むこと矢を射るが如く、快又快、壯又壯である。濱寺公園から濱寺の海岸に出た。さすがに關西第一と稱せられるこの海岸は、折から土曜日を利用した遊泳者の歸途ににぎはひ面目を一層現はした様にも思はれた。西海はるかに太陽の沈むを望み、水樓やうやく人去り行く景色は、畫の雜沓の勢ひにも增して美しく亦うれしいものである。大阪の人々はあたかも我々が逗子鎌倉を目指して遊びに行く如く、多くこの濱寺の海にその體をひたすのである。しかも足は鎌倉の三分の一か四分の一にすぎないから、その勢ひは又須磨明石に增して盛んださうである。

それから南海電車の客となつて、再び堺の海岸にある海の家へ行つた。さすがに關西の人間らしい便利な安全な、しかも營利によく合致した海の家が建てられてゐるのには驚いた。二十錢か出すと、もうその中ぢゆうフリーである。浴場もある、玉臺もある。勿論賣場や娯樂の道具は至れり盡せりで、一日中お辨當などさげて遊びにきてゐる家族づれもある。こゝでお湯に入つてヴエランダへ出てから暫く潮風に涼を入れ

た。四顧やうやく暗く行く人おもむろに去る頃の美しい海岸の情景は、又實にさびしくうれしいものである。又そのまゝ南海電車に乘つて大阪へ走つた。南海電車は關西の電鐵會社の王座を占める大きな範圍に勢力を有してゐる大會社で、電燈電力の傍系事業は勿論、南海新報なる新聞を發行して實に南大阪府、和歌山縣にわたつて大きな勢力を植ゑてゐる。私はこれを見て中央集權の明治維新も、電鐵會社のそれによつて群雄割據の時代に移りつゝあることを想つた。私の關西に於ける大きな驚の一つであることを、又こゝに記しておく。

難波の高島屋の上にあるスエヒロでビフテキを御馳走になつて、それから戎橋筋へ出た。さすがにこの暑さと土曜日の夜とて實に賑やかであつた。ぞろ〳〵人の波が、よせてはかへし返してはよせるそのにぎやかさ、大都市の面目の躍如たるものがあり、東京育ちの自分をして唖然として形容すること能はざらしめた。さてそれより眞直ぐ心齋橋筋へ入つたが上れば上るほどその繁華は增し、大商店は華やかに、その美を行

人の間にきそつてゐるかに見えた。大丸の前で引きかへして今度は道頓堀へ入つた。戎橋・心齋橋筋が東京の銀座としたら、こゝはあたかも新宿に想ひあたる。そして千日前は淺草の様な感じもする。又南海の客となつて梅榮堂へかへつたのが、もう十時頃であつた。

私は大きなこの都のありさまをまのあたり見、そして感じたことは、私のすむ東京は實に官僚的であると言ふ一言につきる。私は東京と比較し得べき大阪へ來て、初めてその感じを與へられた。

翌日は八時頃、梅榮堂を去つた。老主人は私を連れてボートで水都大阪を見せようと言つたが、私は辭して、そのまゝ大阪驛にかへつた。大大阪は全く自由都市であり、進取的であり、すべてお役所的の階級制度の下に働く東京の人間よりもよほど多く明朗であり、文化的であるとつく〴〵感じつゝ大阪驛をたつた。

十一　二百十日すぎ

二百十日もすぎて、今日此頃は夕立が毎日ある。それがきまつて八時頃になつてよくあがる。もう草履でも歩ける位にぴつたりとやんで私の様におそくかへる者にはこの上もなくうれしい賜物であり、さはやかなすが〳〵しい氣持になる。家にかへつて晩飯をすませて二階にねそべると、たまらなく涼しい風が晝間のつかれをやすめる。ことに湯につかつた晩などはつく〴〵秋のうれしさを讃美したくなる。引窓からいびつの月を見る。近所のビルデイングの尖塔にかゝつてゐる月にも都會色を想ひ、足早な白雲が月影をみだすのにも自然の美しさを感じないわけにはゆかない。屋根で無精な婢が、ぬれた竹竿をたゝいて洗ひものをほしてゐる。しかし湯に入つた翌日は、きつと出勤が十一時すぎになるほど疲れてしまふ。

十二　雨の嵐山

私は今度の旅ではからずも嵐山の最も美しい景色に接した。京都の驛へついたお晝頃から、晴てゐた空はすつかりかき曇つて雷がさかんになり出した。取引先をはじから歩いて、雨をやまし〳〵松壽堂へ行つた。主人が嵯峨へ行かないかと言ひ出した。

私が渡月橋についた頃は淋しい煙雨がしと〳〵とふつてゐた。今夜の大花火の臨時さじきなどもうらめしさうに見えた。それからなほ保津川を暫くさかのぼつた。京都らしい粋な構への住居などが、美しい翠をふくんだこの景色に一種の點景をなしてゐるのもゆかしい。舟をやとつて長谷川氏と二人で大きな舟の中へねころんだ。はだかの船頭がお茶をすゝめた。田舍らしい煎餅を一袋呼んでぼんやりと澁いお茶をすゝつた。舟は左に右に舟頭をかへて進んだ。游泳者やボートの連中などは多少さびた味にいやみをそへるが、これも夏の點景かも知れないと樂な氣持になつた。たまには舟ば

たにつかまつて袋のカキモチを請求する心臓の強い男もある。おわんをふせた様な左肩の山はこれを嵐山と言ふと言ふが、實によく綠をあつめてしたゝる様な美しさである。千鳥ヶ淵と言ふところは、心中や遭難の多く行はれるところであると言ふ。

舟をすてた頃は雨はやうやくはげしくなつてゐた。それから温泉旅館と言ふ料理屋に入つた。今座敷が一ぱいだと言ふのでしばらく休憩場で待つてゐたが、氣がせいてたまらない。時計は二時を大分廻つてゐる。長谷川氏をうながして下の食堂へ入つた。食堂でも別に食ふものもないので、しばらく雨をやませて舟にかへつた。やゝ小降りになつた雨は、この時矢庭にものすごい音をたてゝ降り始めた。二人は屋形船の中でとう〳〵この猛雨をしのがなければならなかつた。私は赤いケットにくるまつて坐つてゐたが、雨は益〻はげしく降つてくる。出るにも出られず、とう〳〵一時間もそこにまどろんだ。雨が小降りになつたので、あいまを見て船頭をうながして舟を出した。もう泳ぎの者は勿論、舟に乘つてゐる者もない。兩岸の木の下蔭に雨をさけて

わだかまつてゐるのもあはれである。ただその中を私の舟だけが意にまかせて下つて行く。翠の色は一段とあざやかに木々は活々と映じてすが〳〵しく、雲は山をまいて足早にかけり、私は思はず「嵐山の景觀於是最も佳なり」と叫んだ。初めて遊んでこの美に接す、僥倖この上なしと思うた。今まであんなに賑やかに遊んでゐた者もすつかり影を沒し、嵐山にたゞ私と長谷川氏と僕婢を存するのみと思ふと、快又快。

渡月橋のたもとで名物と言ふ櫻餅を食つた。あんこにくるまつたのもうれしいものだつたが、にぎりに櫻の葉を卷いたのは實に名物らしいゆかしい感じがした。

去つて車に乘る時、私は何んとなく再遊を期する想ひの切なるを覺えた。

十三　京の大文字

私はこの晩はからずも大文字の燃えるのを見た。山科から三條大橋につくと、あれよ〳〵と人々の叫ぶ聲に彼方を眺めてすでに燃え終りに近い大文字を見た。降りつゞ

いた雨は夜になつてもその姿をひそめなかつたのだが、私ははからずこの火を見ることが出來た。

めづらしい雨に連日の暑さをわすれた様な京洛の人々は、よみがへつた様な心持になつて東山や北山に燃えるこの火をながめたらう。過去一千年間の長い歴史が共にかたるこの火に對して京都の人々の心はどう感じるだらうと、私はシャツのしめるのもわすれて大橋にたちつゞけてゐた。非常に洗練された京都の人々が、奥深いその生活をロマンチックな權化に見たてゝ尚もこのみやびの生活を續けて行くだらうとも思つてみた。

「大文字が燃えれば、もう涼しくなります」

と或人が言つた。

× × ×

私のこの感想集が恰度こゝまできた時、それが十三章からなつてゐることを見た。

また恰度その十三章目が、九月四日すなはち金曜日に書いてある。私は寡聞にして西洋のエピソードは知らないけれ共、十三の數と金曜日は非常に忌まれてゐる様だ。つまり日本で言ふと四日と佛滅と言ふのかも知れない。四滅集と名づくる所以である。

私のいまにもえさらうかとしてゐる生命の蠟燭は、生老病死の四苦を滅した超越的なものであつてほしいと思ふ。（昭和十一年九月八日夜）

俳句

出征の旗と一緒の五月幟

軍國や營庭に立つ鯉幟

山の宿やつばり體操の音にあけ

山陽に見せたい様な吾妻峡

山雨は峰をいくつにも切り分ける

早蕨がお菜にうまし今朝の膳

紅つゝじぱつたりと落ちて池をそめ

山雨やつゆには早し四萬の宿

新緑をあんかで見てる四萬の宿

米點や小野子子持に榛名山

待合所さけさかなありうどんあり

ねぎ坊主雨にぬれて淋しかろ

一面の桑が波うつ上州路

すみやきがトーチカに見える軍國(クニ)の春

麥ふみや店番と同じ苦勞だろ

詩

四萬溫泉

溫泉よ　溫泉よ
君はいつの時からか
こゝに流れ出でたる
山の奥の谷間
そして木の葉の下づみから

溫泉よ　溫泉よ
君はいつの時にか
人に見い出されたる
行者の様な人がきて

そして君をひろひ上げたのだ

溫泉よ　溫泉よ
君はいつの時からか
人に活を與へたる
體の疲れた人や
心の荒れたる者たちを

溫泉よ　溫泉よ
君はいつまでもかうして
貧しき者をすくひいやせ
乳房にすがるみどり子の如く

人は永遠（とは）に集はん

新緑の山路

—四萬へ—

車にゆれて九里の路
思ひあまつて來て見れば
山のはざまの四萬川の
流れに清し四萬のやど

紅つゝじ咲く山の邊に
いでゆせゝらぐその中に
一人靜かにゆあむとき
昨日も今日も忘れけり

宿の脊に立つ藥師堂
日毎夜毎に詣でては
昨日に變る今日の身の
ゆあみの幸を祈るかな

さては名に負ふ瀧々の
男々しく清きおつる邊に
重ぬる杖を引きあきて
水晶山にのぼりけり

夜のとばりは早おちて

夜雨になつたかせゝらぎか
山のけはひのひし〳〵と
淋しく溶けぬ夢の中

朝ぎり深く立ちこめて
静かにねむる湯の宿の
廊下に長し湯場の路
はや顔洗ふ人もあり

宿の高どのおばしまに
若き綠はてりはえて
静かにすゝる茶の香り

わが身の幸を祝しけり

やゝ食傷の今朝の膳
早蕨青く味噌汁の
細たけのこに土の香を
思はずはしをかさねけり

つり絲長く川の瀬に
晝中の人のさながらに
岩魚に早し春雨の
寒しとや言はん今朝の霜

四萬の娘に送られて
湯の香に戀し客人の
門邊に近く石楠花が
白きを見れば淋しくもあるか

旅の思ひ出

―上毛ところどころ―

赤城の山の山裾の
利根の流れにおつる邊に
村の白堊日にとけて
風薫るなり五月晴

桑畑遠く綠葉の

若き香りはうるはしく
永遠の想ひにかけられて
榛名の山を望むなり

さては雨ふる神流川
煙るさ中に荒船の
男々しく猛き山ひだに
雨の一夜を旅寝せり

懐古の夢の消えのこる
多胡や山名の碑にきざむ
千年の文字はさながらに

今を昔に語りけり

片品川の山奥に
つかれはてたる旅人の
群はいくつか山ひだに
野営の夢を樂しめり

つくることなき人の子の
なやみをこゝにあさましく
永遠の煙に思ひはく
誰が淺間とは言へるなれ

六里ヶ原の秋ばれに
はこぶ足並輕々と
希望にもゆる小淺間を
夜信濃路へ越えにけり

草津・川原湯・水上と
まだ見ぬ里に思ひはせ
秋の紅葉の居ながらに
初霜を見る今日あした

さては清水の山越えに
越後の國の乙女等が

紺手甲にすげがさの
道行きを見る山の里

秋の收めはわらにふの
淋しくおつる雪を見て
おくる年の瀬冬枯れて
靜かに春を待ちにけり

麥はのびたり

—上毛の旅から—

麥はのびたり實りたり
乙女心の淋しさに
ふいた麥笛なれを待つ

麥はのびたり實りたり
青畑遠く白かべの
戀しく見える思ひして

麥はのびたり實りたり
汽車の煙のきえのこる
思ひはかなく今日の夢

麥はのびたり實りたり
一人小川のせゝらぎに
淋しく時をすごしけり

巍濃莊訪問記

東京驛から一番列車に乘り込んだ。巍濃莊を訪問する目的である。時は昭和十三年六月十二日の日曜日午前五時半であることも書いておかなければならない。この巍濃莊と言ふのは、間氏がこの四月湯河原にたてた別莊のことである。巍濃と言ふ意味の說明はあとにして、この別莊の由來記について誌さなければならない。

元來間氏は三四年前北輕井澤の所謂みそぎ村に山のコッテイジ風の別莊をたてた。私も一度そこに遊んだことがあつた。稱して如雷庵と言ふ山小屋風のものである。しかしそれが造られてから今まで氏の社會的地位は鰻のぼりに昇られて、如雷庵ではいさゝかその用を便じるに不便をきたした。もう一つの理由としては奥さんや子供さんの要求を加味したもう少し世間的なものゝ必要にせまられたのである。ではなぜこの南湯河原が選ばれたのであらうかと言ふと、これは溫泉付であるとか地理的に便利で

あるとか言ふことも理由の數々であらうけれども、元來氏がその輕井澤のみそぎ分讓地に草分けを行ひ、同僚の田氏にも別莊を造らせた。今度は反對に田氏が草分けをしたこの南湯河原を間氏にすゝめたのであらう。そこで、この別莊がきまつたらしい。私が今あげた理由は、私自身が色々の關係から考へて見たおくそくにすぎないことを一寸つけ加へたい。

× × ×

六月の朝はぼんやりとして昨日梅雨に入つたと言ふのに、もう本格的な空模樣である。今にも降り出しさうな空を眺めて、汽車の中には落膽の聲がそこゝに聞えた。主に釣客である。私などは、どうせどつちでもよいと思つてゐるせいか馬鹿に氣が樂であつた。平塚へ來て細雨を見た。麥はもうすつかり生々とした色を失つて、たわゝな穗をさゝへてゐる。なんだか妙にきたない感じがする。これがあの四月頃は眞靑にのびて、いたい樣な穗先をしてゐたのかと思ふと人の一生にも似て悲しくもあつた。し

かし胡瓜、茄子、里芋、甘藷、南瓜、トマトなど夏の膳にうまい野菜のなつてゐるのを見るとなんとなく嬉しい。今にでも料理されて目の前に出された様な嬉しさを感じる。枇杷や桃や西瓜などの畑もうれしい。實際夏は新鮮な野菜や果物の天下である。だん〳〵伊豆に近づくと夏蜜柑の葉がくれになつてゐるのが見えた。小田原で鰺のすしを買つた。これは私の大好物で、もう何時も小田原ではこれにきめてゐる。すつかりすいた腹に氣持のよい朝食である。但しお茶がまづくて不愉快であつた。名にし負ふ相模灣の波も鉛を流した様な感じがした。私はこの月の七日に誕生日を持つてゐる關係上最眞目でもなからうけれ共、この六月と言ふ月が、坐つてあるく旅には又言ひ難い味があるのをしば〳〵發見することがある。汽車や自動車の中、或は宿の二階から眺めた風物には、他の季節に見ることの出來ないおちついた感じを與へられる。昔からの文學的・民俗的なものゝ中にも夏に關するものは少ないと言ふ。況んや梅雨期は少なからう。私はこの期を心から愛するのである。

湯河原の驛へ着くと、すぐ驛前のバスに乘り込んだ。青島君が乘つてゐるのにはおどろいた。

「あなたは初めてですねー。それは恰度いい」

と言はれた。實際好都合だ。今度は岸本君がのり込んだ。きけば青島君は十一時何分に名古屋をたつて大船からこれにのり込んだ。岸本君は一時の汽車にのつて小田原からこれに乘られたさうだ。兩君とも寢ざめの惡い顏をしてゐるのもをかしい。實を言ふと、私は湯河原ははじめての所である。何だかはじめてきた所にしては、もう他人から色々と話もきいたり自分でも想像してゐただけに一寸もものめづらしい感じもしない。落合橋のたもとでおりて橋を渡つて右にをれた。青島君が、この橋からは熱海市に入るのだとやゝつこしい土地の說明をしてくれた。そして、この附近は所謂インチキ屋の巢で風紀の惡い所だと色々說明してくれた。分讓地に入ると、もうすつかり空氣が一變して開豁な雛段が並んでゐる。右にも左にも溫泉の試掘塔が見える。それほ

どこの邊は湧出量が豐富なのである。雨は今先刻からやんで漸く深綠を現はした樹々がしたゝる樣だ。山が近すぎるからあまり米點と言つた感じはないけれ共、その森々の光線を受けた色がさま〴〵に變つて一ケ月ぶりに雨の綠を見ることが出來た。

間氏の別莊は、この分讓地の最上段にある。もうこれ以上はないと言ふトコトンまで登るのだから、さすがに見晴しは一番である。晴れてゐたら東は相模灘の彼方に三浦半島を俯瞰し、西は十國峠を望むことが出來る。北は前の山を指呼の間に設けて深い谷に川のせゝらぎを眺めると言ふことだ。昨夜からの客が四人、間氏は庭師を動員して大童である。奥さんと女中さんは臺所で御挨拶。私達が着くとすぐ間氏は前のお客四人と、下の釣堀に出かけられた。岸本君と二人で湯につかつた。どうして〴〵中中行き屆いたものだ。タイル張りの浴槽も中々ハイカラであるが、如何せん我が感じとは一つにならないのは遺憾である。それでも朝つぱらから湯につかる出世間的な感じ我々凡夫には過ぎたる恩惠感謝にあまりある。浴後兩君は朝食をたべてゐるうち私は

お茶を呑んだ。茶の間の眺めは東向きだけに一番すぐれてゐる。うす墨を流した様にたれこめた雨雲、そしてその中に鉛色の相模灣がうすいかすかな影を現はしてゐる。何んと形容してよいのか恰度兩側から山と山が迫つて、その間に海が三角に見える。

それから岸本君と二人で、間氏のあとを追つて釣堀へ出かけた。青島君は仕事があると言つて金槌やネヂ廻しを持ち廻してゐた。下の日氏の門前を通ると、御主人が俄か百姓の様ないでたちで出て見えた、氏の宅はもう古いからすつかり板について落ちつきがある。これから畑いぢりでもするのだらう。先刻きた急坂を事務所のあるところまで下つた。あがつてきた路を下つて見ると、全然違ふ所を歩いてきた様な感じがする。すぐ前のトツツキの山はもう神奈川縣で、この小さな谷が境界をなしてゐる。面倒なものだ。

釣堀と言ふのは池の廻りに大きな石をたゝんで、そこで釣れる様に出來てゐる。男が竿を持つてきて針の先へ餌をつけてくれて、餌の壺をおいてかへつていつた。先着

の諸先生、何れも太公望然と大石の上に坐つたり、四阿（あづまや）の下にしやがんだりしてゐるが、まだ一つもあげた者はない様だ。呑氣なものだ。私などは氣が短い癇癪持の分だから、今まで釣りと言ふものをしたことがない。十分もしたらいやになつたから、茶屋へ行つて寢てゐた。よくもこんなものに熱中できるものだとも思つた。

それから釣りをしたり晝寢をしたりした。一向面白くないけれ共、監督がゐる以上だまつて指揮を待つた。間氏などは十分快感を覺えてゐるらしいけれ共、一向に釣れない。他の連中も、みんなつまらなさうな面をしてゐる。十二時に垂んとしてやつと歸ることになつた。鯉を二尾かつてかへつた。山へかへると奥さんが待ちうけた様にお茶とお菓子を出してくれたのにありついて、やつと正氣づいた。釣堀で雨にうたれたせいか妙な惡感がする。湯に入つたら手足がしびれて仕方がない。

午後一時、自動車を連ねて眞鶴の釣堀へ出かけた。今度は青島君も入れて九人である。降りみ降らずみの空は低くたれこめて漸く綠色を加へた山々が滴たる様に美し

い。何を見ても水氣をふくんで何んとなく氣持がよい。私はかう言ふ水氣の多い時が一番體によい。その次が晴れ、最も禁物なのは水蒸氣の少ない時に風に吹かれることだ。これで寒氣さへなければ誠に好都合である。自動車は吉濱の海岸を辷つた。そして眞鶴岬の半島を越えた。しかしもう伊豆(實際は相模)の美しさは言ふだけ野暮らしい。眞鶴の町へ入ると濱に新裝の汽船が滿艦飾をしてゐる。これはマーシャル丸と言つて今日の夕方に進水して、この邊の漁師が南洋方面へ出かけるのださうだ。今年はこれで恰度七度目だとは運轉手君のはなし、造船場を廻つてその先の釣堀へついた。石をたゝんで海水を引き入れて海の魚をその中に生簀にしておくことになつてゐる。大小二つあつて各〻魚が見える。雨が次第にふつてきたけれども、男に竿を出させて鰯をつけてもらつた。なる程、先刻のから見るとずつと豪勢である。餌からして違ふ。私が眞先に鯵をあげた。續いて二三人すぐかゝつた。これは面白いどん〳〵とつた。後車の連中も着いて、向側の橋の上で縞鯛を釣り出した。これは又豪勢だ。蟹一つ丸

ごとかけて、すぐ一尺位のがあがるのだから面白い。雨は益〻烈しくなつたから、もうこの邊でやめて傘をさして面々のつるのを見てゐた。見てゐた方が氣樂だ。釣つただけ持ち歸りだからつまらない。考へてやめてゐた。面々それとは知らず大いに獲物について其の多少を論じてゐる。いい氣のものだ。間氏は味噌汁に鰡がいゝと言つて鰡釣りにかゝつたが、どうしてもつれない。雨がひどいので皆んな下の方へ入つたのらしい。私は氏に傘をさしかけて見てゐた。見てゐた方がよつぽど氣樂である。鰡はとう〳〵だめで皮ハギならすぐとれるとのことで、この方を十尾ばかりとつた。

飯の膳についたのが午後四時、ずい分おそい晝食である。腹も十分すいた。第一が縞鯛のあらひ、酒が廻るけれども面白くない。第二が鯵のフライ、これが私の様な平民には恰度いゝものでかへつて旨い。これで飯でもくひたいものだと一人で考へた。酒は大分廻つたけれども、私は一寸もやれなかつた。第三が伊勢海老の濱燒、これは一行の獲物ではない。第四は鯛の燒物であるが、これは數が少なかつた。

この時ガラ〳〵と異常な音がした。みんな慌てゝ障子をあけて外を見ると、今將にマーシャル丸が海へながれ込んだ。思はず皆んな拍手を送つて萬歳を叫んだ。考へて見れば、この連中一行は進水式には御商賣柄隨分立會つておられるから興味があるらしい。但しこの進水式は、これからすぐ處女航海をはじめたには一同いさゝか面喰つた體であつた。これで少憩となつた。腕に自信を覺えた連中は又出て釣り出した。雨がやゝ小降りになつたので、また相當かゝる。面白さうだが疲れがひどいのでやめた。飯は皮ハギの味噌汁でたべた。何だか味噌が惡くて旨くない。飯だけが馬鹿に旨い。

五時十五分にこゝをたつた。ゆうべからの連中と岸本君とは五時の汽車で歸京するとのことだ。生きのいい魚を一籠づつ御土産にして貰つた。四人は眞鶴驛で別れ、岸本君とは湯河原驛で別れた。湯河原驛には週末旅行の浴客がかなりゐる。枝なりの夏蜜柑などうつてゐるのも面白い。それから空になつた前の車には間氏、後の分には青島君と私とがのつて巍瀧莊へかへつた。ガソリン國策の折から何だかこんなもつたい

ない乘物を用ゐて山の上まで行くのが、非常に氣になつた。

歸るなり湯に入つた。恰度日氏が訪ねてきて、がらんと淋しくなつた山莊を賑した。茶の間で菓子など食べながら四方山の話をしたが、いかにも寒くてたまらない。間氏などは浴衣一枚でゐるのに一寸も寒くないらしい。疲れてもゐるので例の寢臺に入つた。恰度二等の寢臺車の樣になつてゐて、左右四個のベッドがつくりつけてある。ナンバーはないけれども、曰く「山彦」曰く「嶺松」曰く「聽雨」と一々名前がついてゐる。鼾聲如雷と言ふ御主人は山彦が常席ださうだから、嶺松と言ふのに入つた。午後六時半、入るなりすぐ眠つた。午後八時便所におきると、まだ皆んなおきておられて食事が始まつたところ、食卓の上に午前中あげた鯉らしいのがあらひになつてゐる。

「さあやらう」

と間氏大元氣であるけれども、私はなんと答へたか、そのまゝ又嶺松に入つて後は知

らなかつた。

月曜日に於ける巍濮莊の行事として、全員かゝつてまづ全部掃除をする。そして食事にはあまつたものをなるべく平げる。火の用心、とじまりをして家具調度一切かたづけて出發することになるのである。しかし今日は奥さんと女中さんは午後まで殘るのださうだから、そんなことは一寸も心配はない。五時前に一浴して間氏と二人で屋外へ出た。山から猛烈な風がふきおろして雲がどん〳〵海の方へ流れて行く。海の彼方はやゝ晴れて昨日見た海の先に眞鶴岬がつき出てゐる。恰度湖の様だ。これは素敵だ。いい朝だと自分では思つた。しかし間氏は、折角私が來たのに、こんな天氣では可哀相だと言ふ様に色々と說明された。それから風を冒して山の方へ散步した。一町ほど先に稻荷社と水道口と茶室などある庭園を見た。それからせまい道をのぼつて筧や竹林や蜜柑畑や水車小屋などを見た。風が吹き出す度毎に向側の濶葉樹林が猛烈に波をうつた。間氏は大きな象でも森の中を行く様だと形容して面白がつた。樹海があ

れば樹濤もある譯だとも言はれた。私はなんだか疲れのせいか寒さのせいか熱でもあるらしい。間氏が色々説明されても調子を合せてゐるだけであつた。後から考へて見ると、早くその事を申上げておけば氏にも失禮ではなかつたらうと慚愧にたへない。それから歸つて朝食の膳についた。味噌汁と干物の朝食、そして海を眺める氣色、この行中の白眉かも知れない。言つてあつた自動車がきたので早々出發した。七時前のこの汽車は東京驛へつくと恰度九時五分前ださうだ。間氏の几帳面さの一端がうかゞはれてうれしくもあり大いに敬服もした。私はこの旅行から續けて二三日伊豆方面を歩きたいと熱海までの切符を買つておいたけれども、體のコンデイシヨンが悪いのと青切符まで御用意下さる御好意に對して御一緒に歸京させていたゞくことにした。

北輕遊記

六時半過ぎてから輕井澤の驛へついた。もう黄昏だし一時間程前に夕立があつたと

言ふので、たゞさへ涼しいこの高原は全く秋の半の様な感じがする。午後三時あの暑さのさ中に上野をたつて、もうこんな涼しさにひたると全く別な世界の様だ。あわてて上衣のボタンをかける。

週末旅行の人々は大概この列車を利用するので、あのせまいブリッヂが全く人でうまつてゐる。赤帽も拂底してゐるので先生のボストン・バックを三つ四つ持つて、あと風呂敷包もあつた。先生は一升びんを二本とあと何やら持つてゐるので、これも相當なアルバイトである。自動車の約束をしたら「遠くの方は、この附近の方々が終つてからにしてくれ」と言はれた。それから寒いから立喰のそばやを呼んだが、下りホームがいそがしくて間に合はない中に自動車が出來た。

運轉手はこの電鐵の經營するもので新輕井澤常駐であるから、夏場かせぎの不案内な者とは違ふときいて、先生は大いに安心らしかつた。沓掛をすぎて千ケ瀧あたりですつかり夜になつた。運轉手は自信があると言つて舊道を通ることにした。專用道路

（新道）は道は樂だけれ共、時間的に不利だと言つた。先生は菊屋で賣つてみえた鹽の強い干物を出して私にすゝめた。なんだか鹽がからくて火が入つてゐないから、旨くないけれども腹の足しに十ばかりたべた。舊道の夜道は隨分危險であるけれども、運轉手のたくみさにまかせてしばらくまどろんだ。この邊は又輕井澤驛附近よりずつと寒くなつてきた。空氣のすがすがしさも何んとなく身に感じてくる。呼吸が何んだか馬鹿に苦しくなつてきた。（要するに旺盛になつてくるのである。）

如雷庵に着くと自分の豫想してゐたよりも勝手が違つてゐるのに一寸鼻をくじかれた様な感じがした。前の時のことはあの當時の記錄にこまかく書いておいたから今更喋々しないけれども非常に家庭的であるには驚いた。おばあさんが三人程をられた。それに先生の御家族である。隨分にぎやかである、奥に客間がもう一つ出來たと言つて、これに通されてまづ洋服を脫いだ。先生は色々老人の方に挨拶されてゐるところを見ると、奥さんのおつかさんと兄さんの奥さんと、も一人は親戚の者らしく察せら

れたが、それ以上は分らなかつた。それから先生と一緒に風呂に入つたが、さすがにもう終ひ湯だから氣持もよくなかつた。それから晩餐の膳についた。あまりものだと言はれる中に鱒の味噌汁はたまらなくうまい。一寸鯉こくに似てゐるけれども、鯉こくより味が上品でしかも強さも十分にある。味噌が木曾の御自慢のものだけに更にうまいのかも知れない。思はずわんをかへた。先刻の干物もあぶつて食へば味はいい。たゞ鹽が少し強いから他の味を消すことになる。それから、これも木曾からきた澤庵があつた。いつたべても田舍の澤庵はうまい。

私は先生に非常にねむいことを訴へた。これは普通に東京で言ふ疲勞したからとか睡眠不足だからと言ふ意味のものではない。先刻も言つた、つまり高原だから空氣中の酸素の量が非常にすくないからであると思つた。それは體の丈夫なものや、乃至永住してゐる者にはわからない。都會からきた私の様な體の弱い人間には非常に強く感じられる。

それから先生の兄さんの住んでをられる方へ行つて、この家の出來たことは前からきいてゐたが入つてみておどろいた。川が家の恰度眞中を貫通してゐる。それに白欅で欄干がついてゐる。對岸へ行く渡廊が二個あつて寢臺が六個と厠がついてゐる。手前は爐がきつてあつて、そのわきに先生の兄さんと言ふ方が坐つてをられて私を迎へてくれた。この方は一年中こゝにをられて川鱒の養殖をされてゐるのださうである。夏はいゝけれども冬は寒いと言はれた。去年まで疊も天井もなかつたのだと言はれた。そしてこの川が寒さを二倍も三倍も強くする上に淺間颪が強いさうだ。それでも木曾育ちの氏にはあまり苦にもならないと言はれた。たゞ人里はなれてゐる上に一人だから不便はこの上なしだと言ふ。今は木曾から奥さんと子供さん二人と手傳ひの男がきてゐるから、かなり賑やかである。先生と私が着くなりすぐお茶を入れて下すつた。それから茶話をはじめた。兄さんは色々と先生に報告的なことを言つてをられたし、先生はその御苦勞を感謝されてゐた。私は菓子などつまみながら色々と今日のこ

とやこの山荘のことなど考へて、時の移るのをわすれてゐた。一時間ほどしてから寝臺にもぐり込んだ。

翌朝五時半頃寝臺からはひ出した。實にいゝ氣持である。もう皆んな起きてをられたが、如雷庵はまだ靜かであつた。女中さんだけおきてゐて炊事をしてゐた。先生と二人で顔を洗つた。おどろいたことには水の中に石鹸を落したのが、どうしても冷めたくてとれない。二の腕まで出してやつとのことでつかみ出した時には、しばらく腕の感じがなくなつてゐた。

それからみそぎ倶樂部へ遊びに入つた。勝手を知つてゐるから、ずつと池の方へ入つて行つた。まだ餌をやつてゐないと見えて、私の足音をききつけて鱒が澤山よつてきた。こゝのは養鱒場から釣堀用としてこゝへ移してきてあるのだから、もうかなりの大きさがある。小さいのでも五寸はある。大きなのは、もう一尺もあらう。それが澤山群つて來るから見てゐても面白い。釣つて見たくなつた。今釣つたらきつとあが

るに違ひない。けれどもやつぱり釣手は遅くならなければ來ない。池のわきのバラックの中で七八人の人達が謠の稽古をやつてゐる、みんな向きむきだからはつきりわからないけれども、二三人顔見知りの人もをられた。

如雷庵に歸つてみると朝食は兄さんの家で喰つてくれと言はれて、先生と二人で膳に向つた。まるで別莊へなどへきた感じは一寸もしない。まるで田舍へお客に行つた様だ。朝食は味噌汁に漬物だけ、それにゆうべ持つてきた丸ぼしの干物である。私は本當の木曾谷の人々の生活などが一寸感じられた様に思つた。藤村の「夜明け前」と言ふ小説の中に出てくる生活——もうそれは六七十年も前のものであるけれども——さう言ふ生活を子供の頃からこの年まで續けられてきた先生の兄さんなどが爐ばたに坐つて刻み煙草などをふかしてゐるのが、恰度今のこの生活、その中に文化、文化の箱の中の様な生活をしてゐる私がゐるのが何んだか不思議な感じがしてならない。

食事がすんでから暫く又寢臺へもぐり込んだ。どうもよくねる。やつぱり私などは

都會生活者であるから、折角の機會に若干でも餘計休養した方が得策であると思つて、ねむれるだけ寢た。今日は日曜日であるからこのみそぎ村の子供さん達は白糸の瀧にハイキングするのださうで、出發したあとは颱風一過した様な靜けさになつた。

兄さんは私に養鱒場を見せると先に立つた。鱒と言つても紅鱒であるが、これが又中々養成がむづかしいさうである。今年のは雛で五萬入れたが、もう二萬位に減つてゐるさうである。これが七千から一萬位ものになれば採算は十分だが、これが五千にも三千にもなるかも知れないと不安さうな顔でかたられた。去年までのは全くの小手調で五千か一萬位しか仕込まなかつたらしい。今年こそはと意氣込んでをられる。

なる程養鱒場へ行つてみると恰度池が五個出來てゐる。一番上の二つには今年のその五萬が二萬になつた口が入つてゐる。これには粉の様にひいた餌を匙で數へてまいてやる。鱒の敏感なことは前からきいてゐたが、現實にみてやつぱりその感じを深くした。一寸位の體のくせに五間も六間も先になげられたのが分るのだから。その次の

二つには去年のが入つてゐた。これも細い餌であるけれども頭數の割に量を多くしてゐる。その次には三年以上のが全部入つてゐた。中にはもう六七寸もある大きなのもゐる。これには小豆大のを入れてやつた。要するに鱒は、三年位までは大きなのにくはれてしまふさうであるから絶對に同居はさせられないさうであるけれども、三年以上からはその心配はないさうだ。

私はこの朝先生の御子息さんから「今日あたり淺間の爆發があります」と言はれたのをきいた。淺間が全然煙をはかずに靜まりかへつてゐる姿は、それと教へられた。果せる哉、それから一時間程たつてから私が寢臺に入つてゐる時、私はまだ經驗したことのない地響をきいた、それは地震の様でも雷の様でも何か火藥や瓦斯のそれの様でもなかつた。私はとんで山の見えるところへ行つた。猛烈な煙の柱、羊毛のかたまりの様な煙が直立して山の三倍位まで立ち昇つてゐて、それが刻々と形を變へて大きくなつて行くのを眺めて、そしてたゞ壯觀の語がこれを一番如實に現はしてゐる様に

思つた。

晝食には如雷庵で、年寄方が御自慢の蕎麥を御馳走された。兄さんや三宅さんも頂戴に見えた。私はそばがすきだ。しかし私はこの頃から何んとなく腹の工合がよくなかつた。それに蕎麥が悪かつたせいか、晝すぎから田舍家の方の二階で横になつた。これは晝寢と言ふけれども、實は内心一寸苦しかつたのである。だまつて人氣をさけて二階にあがつたのもこのせいである。運の悪い時には運の悪いもので、今度はこゝで風邪らしい徴候をおぼえた。しかしこの腹痛とか風邪とか言ふ別々の病氣ではないらしい。要するに前に言つた氣候の變調に對する高山病と言ふ中に一切をふくまれてゐるらしい。

如雷庵で晩餐もいたゞいたが、勿論うまくもなかつた。それから奥座敷で三宅氏と兄さんと先生とで素謠をはじめたし、茶の間では子供さん方がトランプをはじめた。山莊の夜の感じは、私にはこの上もなくうれしく感じられた。その靜寂さはさながら

太古のそれの様に、いかにも自然人にかへつた様な感じがした。私はこの夏の雑沓のない時、この兄さんのところへでも十日か二十日續けてきてゐたならば、樂しいだらうと理想をふがいてみた。

翌朝は強い氣溫の急降下の中に淋しい霧雨を見た。私はとう〳〵高山病にかゝつた様な感じがした。それから雨もやんで太陽が顔を出したので、先生の御令息と一緒に今度は違つた方に散歩に出かけた。朝露の強い草むらをわけて、なんだかやたらに歩き廻つた。着物の腰をからげてあるいても、猿股まですつかり露にぬれた。私は體の調子を恢復させようと思ふせいか相當無理をした。つまり自分でふんばつてみる。それから人にも體の悪いことを見られまいとする。

庵に歸つて休んでゐると、先生が顔が青いと言はれた。私はその時は少々熱があつたらしい。今日歸らせていたゞくことにした。

「大丈夫か?」

と先生が言はれたが、やつぱり病むなら東京がいい。ことに先生のお家で病むには、あまりにも心もとないとも思つた。

午前十一時、先生と御令息と三人で押出し行のバスに乗つた。かつて井出巡査と青島德久二君とで、こゝを通つて押出しへ入つた當時のことなどが新しく自分の心によみがへつてきた。

鬼押出しの岩窟ホールの二階で中食の御馳走になつた。マウント・ランチとライスカレーを喰べた。こゝのライスカレーはとてもうまいと評判のものらしいが、そんな感心する程のものでもなかつた。淺間の山容がとても美しく見えた。私はこゝで爆發でもあれば壯觀だらうと思つた。

私はそれからおいとまをつげて一人で輕井澤行のバスに乗つた。天氣はよし、秋氣は清澄なので、バスは隨分にぎやかであつた。例の地獄原へ出ると辨當をもつたピクニックの連中が澤山遊んでゐた。さすがに輕井澤だ。このガソリンの貴重な世の中に

自動車が澤山のりすてられてあつた。峯の茶屋から專用道路に入つて下つた。千ヶ瀧に入ると別莊地帶は隨分にぎやかである。綠の間に靑や赤の西洋館が散在してゐるのも一寸面白く感じられた。東京ではとても見られない派手なりをした男や女がのそのそしてゐるのも一寸浮世ばなれしてゐる。沓掛の驛から舊道を通つて輕井澤の驛までのつた。汽車が出たあとの靜けさにしばらく橫になつてゐたが、どうも熱が高くて苦しくてたまらない。

二時二十四分、輕井澤驛をたつた。汽車がすいてゐたのを幸ひにすぐ橫になつて寢た。どうしても苦しくてたまらない、熱のせいか吐氣を催して一寸もねむれない。こんないやなことは珍しい。去年の三月、京都からのかへりの樣な感じがしてならない。

それから高崎へおりて武井へよつたが、とう〳〵寢込んで墓參へも小川へも行かなかつた。それから夜の汽車でかへる豫定を變更して、その晩は武井で泊つた。翌朝の急行で東京へかへつたが、とう〳〵その日は店で寢てゐた。

× × ×

考へてみると、この旅行は全くの失敗であつた。しかし結局この失敗については何か數々のことを教へられた様にも思はれて、かへつて印象の深かつたことを感じた。

上高地に遊ぶ

F 13. 9. 15.
T 13. 9. 18.

自動車は崎嶇たる梓川の溪谷をさかのぼつてゐた。乘客は私一人、それに上高地の宿屋の番頭達がゐた。

私は靜かに樂しいこの旅の事などを想像してみた。上高地とはどんな處だらう。穗高は見えるかしら、それに厄介になることにした五千尺と言ふ宿屋はどんなだらうなどと考へた。樂しくもあり、何んとなく淋しくもあつた。

「あれが燒岳です」

「これが大正池です」

と五千尺の男がをしへてくれた。宿の男達の話をきいてゐると、何んでも客は全體で十人位しかゐないらしい。今日着いたのは私だけで、五千尺の客も今夜は私だけと言はれて、この季節はづれにきたことをうれしく思つた。靜思保養を目的とする旅として、私は無人境にも近い秋の上高地を選んだことをうれしく思つた。

宿につく頃、穗高を目と鼻の先に眺めることが出來た。私は、

「これが穗高か」

と言つた樣な意外な感じにうたれた。あまりにも近く、あまりにも小さかつた。あのダージリンから見たヒマラヤの群峯、スイスから眺めたあのアルプスの偉容、そんな景色を想像してゐた私には一寸意外な氣がした。小さな感じ、それは日本の屋根とさへ言はれる穗高さへも規模の小さい島國的な箱庭式の感じが、眞先に私をして失望の極に達せしめた。でも私は、宿の窓から日の暮れるのも忘れて一心に穗高のすがたを眺めてゐた。

私が案内された部屋は、一番奥の山を眺めるに一番便利な部屋であつた。女中が素早く火鉢の火を作つてくれたのが、たまらなく懐しかつた。それほど山の黄昏は冷え込んでくる。私は十分寒さの用意をしてきたので、急いでシャツなどをとり出した。私は何んとなく非常な愉快さを感じて十分な満足を覚えた。務から何んの苦もなくのがれて、そして全く未知の上高地まで来た。まだその上こんな静かな宿にありつくことが出来た。穂高も十分味へる。その私の愉快さ、満足さ、それは一ケ月間のスランプを一日で抜けきつて、まだその上に大きな喜悦が十二分に得られた。その幸福さ。

その夜の膳に、私は岩魚の鹽焼をよばれた。それは如何にも無造作に焼かれたものであつたけれども、それだけに又味もまだ十分生かせられてゐた。私は頭から三口か四口に喰ひつく様にしてたべた。實に晴々とした氣分になつた。

それから女中が「お湯です」と呼びにきた。もつとも先刻も着くなり「いかゞですか」と言はれたが、冷えるとこまると思つて寝しなに入ることに言つておいた。

長い廊下をずつと下つて随分奥まつたところに暗い浴槽を見た。寒いので大急ぎでとび込んだ大きな湯に、私一人入つてゐた。温泉と違つて何だか妙にきたない感じがした。しかし私は夏の大雨の日のことなど考へてみると、随分この風呂も登山者の徒然を慰めるだらうと思つた。これから出發と言ふ客も皆んな足止めとなる。登山してゐた者も、キャンプをはつてゐた者も一様に宿屋を目がけてくる。歸る便すら無くなれば、おそらくこの宿の部屋と言ふ部屋は全部満員にまで追ひ込まれるであらう。若いアルピニストが憂鬱な顔をして空を眺めてはやるせない感情を風呂に満たしてゐることであらう。全く私の今の境地と思ひ合せてをかしくもあり、あはれでもあつた。私もかつては、その憂鬱を空にながめる群だつたのである。

翌朝、私はまだ暗い中に目をさました。ほんたうによく寝られた。夜中に一度もおきなかつた。そして、そのせいか非常に體が休まつた様に思はれた。

まだあたりは静かである。はるか母屋の方から響いてくるかすかな物音をきゝわけ

ることが出來た。梓川の流は、今日も又勇壯な音をたてゝ流れてゐるのもうれしかつた。その水音、それは私がかつて經驗したどのそれよりも美しい樣に思はれた。私は床に入つたまゝ煙草に火をつけてふかしはじめた。「休養を目的とした旅だ、出來るだけ心を休めよう」と考へてゐても、かうしてたまに靜寂な生活に入るとたまらなく心が動く。無心になつてゐようと思つてゐても、妙に考へる。考へ續ける。

六時になつてから洋服をきて外へ出た。實際はげしい寒さである。河童橋の上に、うすい霜を見た。

「お早うございます」

宿の者が言つた。返事した私の息が湯氣の樣に見えた。

川を渡つた。向ふを下の方へ歩いて行つた。西糸屋の前までくると、泊り客らしいのが炬燵をかゝへて二階からこつちを眺めてゐるのも寒さうである。私は足先の防寒を忘れたので、どうにも寒くて下駄がはいてゐられなかつた。飛ぶやうにして宿まで

かへつた。

十分でもなかつたけれども運動をしてきてお茶の味もいい。ことに寒い時の朝茶は爽快な感じがする。食事や菓子の後のお茶はむしろ口を洗ふ様な感じがするが、梅干でのむお茶はたまらなく私はすきである。東京に居てもよくこれはやることがある。ことに霜の朝、雪晴れの朝、それに眞夏の朝などはうれしい。都會生活の一番の慰安はお茶をすゝることだ。ことに綠茶はいい、味よりも香りにある様な氣がする。

九時になつてから私は輕裝して宿を出た。もう日も高く寒さもやはらいだ。小梨平の入口にある瀬で洗濯をしてゐた婢が、

「明神池へおいでですか？」

と言つた。宿の女だらう。見ても冷たさうに流れに入つて客用の浴衣をゆすいでゐた。

小梨平を通る頃、私はそこが美しい公園地帶の小徑の様な感じがした。溪谷に沿ふこともあつた。おそろしい様な山根を歩むこともあつた。或は又熊笹の美しいスロー

プを横切ることもあつた。しかし、それは全く公園地のそれの様に散歩路の感じである。時としては一寸ひらけた原に出ると、私はかゝさず穂高をながめた。大きな明神岳のうしろに彼は鐵壁の如くわだかまつてゐると、私は安心した様に歩みを續けるのであつた。

時として路は山の根をまいて小高く登ることがあると、思ひ出した様に梓川のあの白い美しい河原が太陽に照らされてゐるのを望むのであつた。

宿を出てから小一時間に、私は吉城屋と言ふ茶屋の前に出た。それを左にそれて梓川を渡るころには、私は何んとも言へないすみきつた心になつた。かけてある丸木橋からおりて流れに手を入れた。清冽な流れは、私をして心の底まで感じしめる様なつめたさを覺えた。

明神池は明神岳のおち込む様な傾斜の元に神祕的な影をうかべてゐた。數々の傳說でもありさうな一寸おそろしい様な感じもした。それと同時に、私は上高地の奥に更

にかうした幽邃境を見い出すことを不思議にさへ思つた。私は輕い疲勞を覺えてゐたので茶屋へ戻つて名物力餅を呼んだ。婢はおしるこだけがすぐ出來ると答へた。私は少なからず失望せざるを得なかつた。案內記にも度々見た。こゝへ來て更に數々の看板を見て、私は大きな期待をもつてゐた。出來ることならおみやげにとも思つた。物たりなさをしるこに滿たして、もと來た途を靜かに歩きはじめた。

中食はたまらなくうまかつた。適度の運動にやゝ疲勞を覺えて、のどがかはくせいか、たまらなくお茶がうまい。かうして心にまかせて散歩をして來ると氣持が非常によいし、コンデイションも良好である。これはたしかに藥になるし、こゝまで勇氣を出してきた甲斐もあると思つた。

隣りと奥にお客がきたらしかつた。

それから女中に床をのべさせて晝寢をすることにした。なんだか顏が馬鹿にほてる。足を伸ばしたくなる。晝寢も一寸もつたいない樣な氣がするが、どうせ靜養の旅

だ、最もふさはしからうと横になつた。なるほどすぐ寢た。

五時に目をさました。私は寒さの爲に床をぬけ出すことが出來なかつた。日中は暖いが日が入ると急に冷くなる。私は蒲團を引きずつて窓際までもつてきた。そこは寢てゐても穗高を眺めることが出來た。まだ連峰には日が照つてゐた。かうして此方から眺めてゐると鐵のかたまりの樣に見える。頂き附近の太陽のさしてゐるところは恰度金を溶かして頭にだけ流した樣にはつきり見えた。まだあたりはうすらあかるかつた。宿の男が川に入つて釣つてゐるのが見える。和服姿でこつちから見てゐる女は、昨日乘つてきた乘合自動車の車掌である。いかにも僻地らしい感じがした。

女中がランプを提げて入つてきて五分芯を十分出して行つた。室の中心が窓際から急にランプの下にうつつた。私ははじめて體をもたげて厠へたつた。厠も暗かつた。窓から燒岳を眺めたが、もう見えなかつた。いよ〳〵上高地に夜がきた。今はアルプス銀座もなからう。あの穗高小屋も今年は若い者が出征してしまつたから、もう閉め

てしまつたと聞くのも戦時らしかつた。私は今日は上高地にあけて上高地にくれた。些細な思ひ出まで私の一生につきまとふであらうと思つたり、明日は歸らなければならない淡い憂鬱が思ひ出された。

「今晩も岩魚がありますが、何にしませう?」

と女中が唐紙に片ひざを立てゝ云つた。

「何にしてよいかわからない——一番うまい様にして下さい」

と私は答へた。私は隨分面白い宿だと思つた。次にその親切に感謝した。

寢てゐたせいか晩餐はさ程うまくもなかつた。が、たゞ圍ひ蕨の味噌汁は、何んとなく山の香りにみたされて味つて喰べた。岩魚は味噌燒にしてあつた。味噌がからくて期待の程でもなかつたが、心づくしをありがたく受けずにはゐられなかつた。

翌朝も私は昨日と同じ様に河童橋を渡つて梓川にそつて下つた。今朝は靴をはいて出たので寒くもなかつた。穂高がなんだか白さを增した様に感じられた。雪が降つた

のだらう。かすかに襞のくぼみの中に鹽をまいた様に見えた。

清水屋の前を通り越して梓川を渡つた。橋に霜が降りてゐたが、そこにたゞ一つ自轉車の轍のあとを見た。さつきすれちがつた郵便屋さんのである。橋を渡つてふり返つて見ると、私の靴のあとがはつきり見えた。私は何んだか早くきたことをうれしく思はずにはゐられなかつた。それから帝國ホテルの裏を通つて熊笹におほはれた小徑を歸路についた。梓川の河原が今日はバカに白くかゞやいてゐる様に感じられた。「今日は東京へ歸るのだ」と私は思つてゐた。旅の飯にも飽きたホーム・シックと、又あの暗い都會生活のつらさとが一緒になつて、私の心を支配した。私は好んで旅に出なければならぬ、つとめて自然に親まねばならぬとは、健康上、精神上、私は常に考へさせられてゐるのである。

味噌汁の味も、澤庵の味も、もうこれで當分おわかれである。私はきつと再遊しようと思つた。一人でもよし、友達とでもよし、一度あの穗高へのぼつて見よう。日本

の屋根だ。

私は讀みさしの本をとぢてカバンになげ込んだ。そして又山を見入つた。山はたゞ私に美しい「眺め」を送るだけで、だまつてゐた。秋の山は沈默してゐる樣な、そこに言ひ知れないたまらない魅力を感じた。山よ、又逢ひに來よう。

私はお晝頃、五千尺を出た。

送つてきた男が自動車の中で色々と上高地の話をしてくれるのも、總決算の樣な氣がしてうれしかつた。今夏は戰爭で北アルプスでは二萬人位の客減りだと言つた。これは他の温泉地などと違つた事情らしい。つまり健康な若者が減つたからであらう。第〇師團はあの名高い廬山で聯隊長を失ふ程の激戰を交へてゐる。きつとアルプス仕込みのづはものが、あの山岳戰に活躍してゐるだらうことを祈つた。

白樺林も大正池も見えなくなつた。燒岳が數條の煙をはきながら、私を送つてくれた。

自動車は、又梓川にそつて下つて行つた。了。（昭和十三年十月十三日複寫）

旅にて

一

私はいつも信越線の客となる時、横川や輕井澤のホームにあるそばやが、たまらなく旅らしいうれしさを感じさせられる。旅の愉快さの一つであらう。

私はなるべく空腹にしておいて、いつも一番のりする。そして二三杯喰べる。今度の旅は人氣の少ない夜行だつた。私は上りホームから、そばやを呼んで喰べた。

信州境までくると、そばも本當の味を與へてくれる。それに私はその氣分がたまらなくすきだ。ことに霜の夜、月の夜。そして眠むたさうな顔をして喰べるそば、私はつく〴〵と旅に出たうれしさを感じさせられる。

二

長野驛からあの大通りを善光寺さまで歩くうち、私はどこにもこゝにもリンゴの山を見て、

「長野は林檎の多いところだなー」

と思つた。或は皿に一山づつ分けて、或はもうちやんと手のかゝる籠に入れて、お土産用にしてあつた。

善光寺さまの境内に入ると兩側に屋臺を出してこゝでもリンゴを澤山賣つてゐた。紫色の小旗を立てゝ團體の田舍者らしい人達が、歩きながらリンゴをうまさうに丸かじりしながら山門を下つてきた。

× × ×

私は長野を思ひ出すと、善光寺さまとリンゴだけが私の印象にのこつてゐる。林檎

と古びた伽藍だけが！

三

私は昨夜の夜汽車の疲れで、暑い日ざしに眠りこけてゐた。汽車は又、あへぎ〳〵いくつかのトンネルをくゞつた。

私はこのものうい午睡の中に汽車が止る音と同時に、

「姨捨」「姨捨」

と驛夫の呼ぶ聲をきいた。私は思はず眠りから覺めて、もの靜かなこの高原の驛を見た。日はかん〳〵照つてゐるが、凉しい風がすゝきの穗をかたむけるほど秋はもう老いてゐた。はるか谷の底に千曲川の流れが光つてゐるのも美しく感じられる。夜なれば田毎の月の名所も訪ひたい様な感じがした。

信濃高原の秋は、このあたりから始まる様に何を見ても秋は秋らしい感傷に心をう

ばはれて、こゝでも旅に出て新しい秋に親しむことの出來たことをうれしく思つた。

四

私ははじめて諏訪湖を見た。上諏訪から下諏訪へ汽車は快い走りをつゞけつゝ下つた。私が見た湖は、想像してゐるそれよりもずつとあかるい感じがした。私はあの雪にとざされた信濃の山々、その中に沈められた様な氷結の諏訪湖、私はこんなことを思ひながら諏訪湖を見た。私は裏切られた想像に唖然として湖を眺めた。

「こんなあかるい湖か！」

と、私は今更の様に自分の頭をたゝいてみた。

こゝで私は再遊を期することにした。

昭和十五年四月十五日　印刷
昭和十五年四月十九日　發行

東京市麹町區丸ビル二階
編輯兼發行者　株式會社　和風堂
馬場一郎

東京市豐島區西巢鴨二ノ二七ノ二二
印刷者　合資會社　光文社
山下謙之助

ぶらこと
の
まて
手紙

うつくしき
色を
見ると
つなぐ
手